

はじめに（研究の目的）

筆者は、福岡市西区姪浜で活動している「唐津街道姪浜まちづくり協議会」の初代事務局長の役を担った（平成 19 年 3 月～28 年 5 月）。平成 19 年 3 月に協議会を立ち上げて以来、『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』を目標に、地域固有の歴史・文化資源を活かしたまちづくりを推進してきた。

振り返ってみると、姪浜での活動を始めた頃、ある知人から「私も姪浜の事業に関わったことがあるが、行政や助成金頼みで自ら主体的に動こうとしない地域性がある。大塚さんが頑張るのなら応援はするが、まちづくりの土壌がない地域である。特に地域外の人間がまちづくりに関わることは難しい。」と言われたことがある。筆者は当時、この言葉を軽く聞き流していたが、活動を進める中で、この言葉の持つ意味を幾度も実感することとなった。

それでも、筆者は事務局長として、姪浜ならではのまちづくり推進のための企画立案、関係者との協議・調整、具体的な実践を率先して行う他、会計事務、各種申請事務など時間と労力を要する多くの業務を粘り強く推進してきた。

当初は活動が軌道に乗るまでの 3 年間程度は頑張ろうと考えていたが、様々な活動を展開する中でいろいろな成果も表れ、それに伴い活動も進化させていった。また、それぞれのステージの地域課題に対応したまちづくりの目標を立て、具体的な事業を展開してきた。姪浜への熱い想いを込めた 10 年間の活動は、「都市景観大賞（国土交通大臣賞）」や「ふるさとづくり大賞（総務大臣賞）」などとして評価され、姪浜の魅力や協議会の活動を全国に発信することができた。

このように、姪浜という地域は筆者にとって魅力的なフィールドであり、姪浜での 10 年間の活動はとても充実したものであった。そして、地域内外の多くの方々との出会いが、筆者の活動のエネルギーであり、精力的な活動で得たものも多かった。

筆者は、今後も「姪浜のまちづくりの次のステージ」に向けて、地域の関係団体を巻き込みながら、さらに活動をステップアップさせていく予定であったが、まちづくりへの志や協議会の運営方針などに対する当時の会員との考え方の相違から、10 年という節目を機会に断腸の想いで協議会卒業を決意した。10 年というのは一つの区切りであり、これまでの活動を振り返るとともに、環境を変えて、さらに自分を磨いていく絶好の機会と考えた。

また、協議会卒業を決意しかけた平成 28 年 4 月中旬に、大学時代を過ごした熊本で震度 7 の大規模地震が 2 度発生し、大きな被害をもたらした。福岡市役所で建築物の耐震化の仕事も担当している筆者にとっては、人ごとではない。案の定、市民からの問い合わせも大幅に増えた。隣県で発生した地震はさすがに福岡市民に与える影響も大きいと実感した。

ちょうど熊本地震前の 3 月下旬～4 月上旬にかけて 2 回、熊本や阿蘇に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村などを見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。それはまさに『建築物の耐震化は重要な仕事である。大学時代の恩返しをしよう。まちづくりの原点に戻ろう。』と筆者に伝えているようだった。姪浜という狭いフィールド、まちづくり協議会という小さな組織を離れ、もっと大きな視点で世界を見てみようというメッセージだったのだろう。

また、筆者は事務局長という役柄、毎週末や帰宅後の多くの時間を協議会活動の企画立案やイベントに費やすなど、その関わり方は明らかにボランティアの域を超えていた。活動費も右肩上がりであり、平均活動費は助成金を含め年間約 190 万円である。これだけの活動を地域の一大団体が継続して行うのは大変であり、筆者の負担は年々増していき、心身ともに疲労はピークに達していた。

このため、当分は充電期間とし、外からの視点でいろいろな地域のまちづくりを見ていくこととした。まず、始めたことは「地域づくりを巡る小さなまち旅」であり、時間を見つけて実践している。市内でもいいし、市外、県外でもいい。いろいろな地域を旅することは、地域づくりを考える上で大いに参考になるし、新たな出会いもある。特に、大学時代の思い出の多い熊本の復興過程を見に定期的に熊本を訪問することとした。

また、この充電期間を利用して、今までの事務局長としての活動を記録としてまとめ、家族やお世話になった方々に筆者の姪浜への想いを伝えていくこととした。この中では、協議会活動の 10 年間だけでなく、大学時代からの建築や地域づくりへの想いも振り返りながら、地域固有の魅力資源を活かしたまちづくりについても考えていきたい。

平成 28 年 6 月（活動記録のスタート）



活動記録を書き始めた平成 28 年 6 月、熊本地震後の熊本城を訪れた。

なお、この活動記録については、第 1 章を書き終えた頃に(公財)福岡アジア都市研究所に会員研究として認めていただいた。引き続き、執筆に励みたい。

平成 28 年 9 月（第 2 章のスタート）

身近な地域資源を活かしたまちづくり活動記録

～姪浜での10年の実践活動を中心とした、建築と地域づくりへの思い～

目 次

はじめに（研究の目的）	1
【第1章】 学生時代～福岡市役所時代	
1 学生時代	10
（1）実家の思い出	
（2）熊本大学建築学科入学（建築との出会い）	
（3）最初の設計	
（4）楽しい設計課題	
（5）建築への興味、建築巡り	
（6）木島安史先生	
（7）卒業論文	
（8）卒業設計	
2 社会人時代（鴻池組時代）	22
（1）鴻池組入社	
（2）設計部配属と御茶ノ水	
（3）寮生活とコンペ	
（4）銀座の思い出	
（5）建築巡り	
（6）歴史的建造物への興味	
（7）歴史的町並みへの興味	
（8）現場配属	
（9）荒川区町屋での生活と篠田光滋さん	
（10）最後の現場、鴻池組退社	
（11）東京から福岡へ	
（12）最初の海外旅行	
3 福岡市役所時代	39
（1）福岡市での生活スタート	
（2）福岡市役所入庁、住宅供給公社配属	
（3）シーサイドももちクリスタージュ	

- (4) 都市景観室配属とシーサイドももち都市景観形成地区の指定
- (5) 御供所都市景観形成地区の指定
- (6) 御供所・瀧田喜代三さん
- (7) 海外派遣研修
- (8) 福岡都市科学研究所配属
- (9) 耐震や空家対策の仕事

【第2章】 唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動

4 姪浜への関わり	7 1
(1) 最大のきっかけは福岡県西方沖地震	
(2) 姪浜をどこにでもあるようなまちにしたい	
(3) まちづくり協議会発足	
5 筆者が考える姪浜の魅力	7 5
(1) 長く住んでいると見失いがちな地域の魅力	
(2) 10 年前に筆者が直感した姪浜の魅力	
(3) 筆者が考える姪浜の魅力	
6 まちづくり協議会の活動概要	7 9
(1) 活動概要	
(2) 活動内容一覧	
7 1st ステージの活動（主に平成 19 年度～21 年度）	8 1
(1) 地域課題、まちづくりの目標	
(2) 1st ステージの最初の定例会	
8 平成 19 年度の活動	8 2
(1) 地域の魅力資源調査、魅力資源集の作成、まち歩きマップの作成	
(2) キックオフイベント	
(3) 春の町並みイベント 2008	
9 平成 20 年度の活動	8 8
(1) トークショー	
(2) 先進都市調査	
(3) まちなみパネル展	
(4) 秋の町並みイベント 2008	
(5) 唐津街道サミット	
(6) 「版画で歩く福博のまち～二川秀臣～」展	
(7) 春の町並みイベント 2009	

10 平成 21 年度の活動	 9 4
(1) 町家再生の実践	
(2) 灯明コンサート IN 興徳寺	
(3) 秋の町並みイベント 2009	
(4) 旧町名表示板の設置	
(5) まちの案内所の開設	
(6) 春の町並みイベント 2010	
(7) 定例会	
11 1st ステージの振り返り	 1 0 3
(1) 主な活動メンバー	
(2) 活動資金	
(3) 表彰、認定	
(4) 総括	
12 2nd ステージの活動（主に平成 22 年度～25 年度）	 1 0 6
(1) 地域課題、まちづくりの目標	
(2) 2nd ステージの最初の定例会	
13 平成 22 年度の活動	 1 0 8
(1) まちの案内所披露式	
(2) 福岡市長との対話集会「聞きたかけん」	
(3) 九州大学アーバンデザインセミナー	
(4) かわら版の創刊	
(5) 先進都市調査	
(6) 唐津街道特産品フェア	
(7) 景観歴史発掘ガイドツアー	
(8) まちづくり計画策定ワークショップ	
(9) 広域回遊マップ作成	
(10) 唐津街道サミット IN 姪浜宿	
(11) 「元気！姪浜計画」の策定	
14 平成 23 年度の活動	 1 2 2
(1) 女性部会「はまこみち」発足	
(2) 「姪浜ブランド」の認定	
(3) 灯明コンサート IN 姪浜住吉神社	
(4) 唐津街道物産展	
(5) 景観歴史発掘ガイドツアー	
(6) 景観づくり委員会、景観づくり計画 STEP 1 の策定	

(7) 九州大学都市・建築ワークショップ

(8) 「ふくおか地域づくり活動賞奨励賞」受賞

15 平成 24 年度の活動 1 3 2

(1) 協議会設立 5 周年記念イベント「唐津街道姪浜ウィーク」

(2) 協議会設立 5 周年記念交流会

(3) 「姪浜町家」の認定

(4) 灯明コンサート IN 興徳寺

(5) 唐津街道を知る一週間

(6) 全国町並みゼミ福岡大会

(7) 「景観発見&まちづくり」体験体感ツアーIN 姪浜

(8) 福岡県景観大会での活動 PR

(9) 春の町家コンサート

(10) 歴史散策と桜の名所巡り

16 平成 25 年度の活動 1 4 0

(1) まち歩きワークショップ

(2) 第 2 回姪浜町家認定式

(3) まち歩きマップ改訂

(4) 感謝状

(5) NPO 日本都市計画家協会「日本まちづくり大賞」受賞

(6) ふくおか共助社会づくり表彰「協働部門賞」受賞

(7) 唐津街道姪浜ウィーク「とっておきの姪浜！」

(8) 「あしたのまち・くらしづくり活動賞」受賞

(9) 様々な受賞に伴う協議会活動の PR

(10) 地域の皆さま方からの贈り物

(11) 子どもウォークラリー

(12) 子ども落書き消し隊

(13) 三賞受賞記念祝賀会

(14) まちなみフォーラム IN 唐津街道姪浜

(15) 姪浜町家等の認定

(16) 景観づくり計画 STEP 2 策定

(17) 姪浜景観まちづくり宣言

17 2nd ステージの振り返り 1 5 8

(1) 主な活動メンバー

(2) 活動資金

(3) 表彰、認定

(4) 総括

18 3rdステージの活動（主に平成 26 年度～27 年度）	 1 6 1
（1）地域課題、まちづくりの目標	
（2）3rd ステージの最初の総会	
19 平成 26 年度の活動	 1 6 3
（1）「ふくおか美まちチャンネル」出演	
（2）町家談義	
（3）阿部真也先生との再会	
（4）福岡市職員技術研究発表会	
（5）法被作成	
（6）登録文化財 みそ蔵特別公開	
（7）とっておきの姪浜！	
（8）「姪浜景観づくりの手引き」発行	
（9）建築士会「まちづくり優秀賞」受賞	
（10）執筆	
（11）都市景観大賞現地審査	
（12）姪浜ネクスト始動	
20 平成 27 年度の活動	 1 7 6
（1）総会	
（2）「都市景観大賞（景観教育・普及啓発部門）」受賞	
（3）都市景観大賞受賞祝賀会	
（4）夏の遊覧船イベント	
（5）都市景観大賞受賞による視察研修受け入れ	
（6）姪浜ネクスト準備会	
（7）灯明コンサート IN 興徳寺	
（8）最後のみそ蔵イベント	
（9）かわら版「みそ蔵特集」	
（10）新案内所改修	
（11）「ふるさとづくり大賞」受賞	
（12）春のまち旅 2016	
（13）姪浜ネクスト発足式&祝賀会	
（14）win-win-win-win 方式による、まち歩きマップの改訂	
（15）「姪浜まち旅プロジェクト計画」の策定	
21 3rdステージの振り返り	 1 9 4
（1）主な活動メンバー	
（2）活動資金	
（3）表彰	

（４）総括	
22 みそ蔵（登録有形文化財・マイヅル味噌）	…………… 196
（１）みそ蔵とマイヅル味噌の歴史	
（２）みそ蔵での多彩なイベント	
（３）みそ蔵に対する筆者の思い	
（４）なぜ残せなかったのか	
（５）みそ蔵に関わる思い出	
23 協議会卒業	…………… 205
（１）卒業決意	
（２）最後の取材	
（３）協議会卒業	
（４）協議会へのお土産	
（５）まちづくりは志	
【第３章】 姪浜での多彩なまちづくり活動の成果と筆者の提案	
24 活動のポイントと継続的で多彩なまちづくり活動の成果	…………… 211
（１）活動のポイント（事務局長として工夫したこと）	
（２）継続的で多彩なまちづくり活動の成果	
25 新たな課題や動向を踏まえた、今後の姪浜のまちづくりの展開方策の提案	…………… 218
（１）新たな課題や動向	
（２）新たな課題や動向への対応	
（３）具体的な提案	
26 公務員や建築士の地域のまちづくりへの関わり方の提案	…………… 227
（１）地域に飛び出す公務員としての提案	
（２）建築士としての提案	
【第４章】 唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業後	
27 卒業後	…………… 229
（１）地域づくりを巡る小さなまち旅	
（２）思い出の場所再訪	
（３）熊本地震と筆者	
（４）姪浜での活動の振り返り（活動記録作成）	
（５）姪浜や市役所での経験を活かせ	
おわりに	…………… 239

コラム

1	建築書との出会い	2 1
2	ベネチア再訪	3 8
3	北九州市立中央図書館再訪	7 0
4	震度 6 弱からの転機	7 1
5	東京駅	9 3
6	人生は二刀流、二毛作	1 4 3
7	『姪浜の宝を福岡市民の宝に！』の実現に向けて	1 4 6
8	気持ちの 100 倍返し	1 5 7
9	宗像剛氏との再会	1 7 1
10	課題に取り組むこと＝まちづくりの楽しさ	1 7 5
11	ピンチをチャンスに	1 9 3
12	地域に根ざしたまちづくり協議会に向けて	2 1 0

参考資料

- 1 筆者の主な年表
- 2 唐津街道姪浜まちづくり協議会と筆者の 10 年の歩み
- 3 姪浜プロジェクト 48 (MPT48)
～筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に取り組んだ多彩な活動～
- 4 進行形！景観まちづくり～歴史的資源を活かした町並みづくりと賑わいづくり～
(月刊「地方自治職員研修」2015 年 1 月号)
- 5 地域の誇り & まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～
(日本建築士会連合会 会誌「建築士」2015 年 3 月号)
- 6 内陸部のまち・横手市増田と海辺のまち・福岡市姪浜
～日本海を隔てて 1100 km 離れた地域の新たな交流の芽生え～
(2013 年 第 9 回 JTB 交流文化賞応募作品)
- 7 熊本地震と私～オオクワガタから始まった旅は復興へと向かう旅へ～
(2016 年 第 12 回 JTB 交流文化賞応募作品)

第1章

学生時代～福岡市役所時代

1 学生時代

(1) 実家の思い出

この活動記録は、姪浜での活動が中心であるが、なぜこれほどまでに姪浜の活動に没頭してきたのか、子どもの頃に遡って振り返ってみよう。

筆者の実家は福岡県行橋市にある。行橋市は北九州市小倉と大分県中津市の間くらいに位置する、人口7万人程の小都市である。実家は JR 行橋駅から徒歩5分程度の便利な場所にある。ここは当時、博多町と呼ばれ、今と違い賑わっていたようだ。筆者は高校時代までここで育った。子どもの頃の家は、建材店との併用住宅で、伝統的様式の町家建築であり、五右衛門風呂もあった。庭には小さな池もあり、鯉も飼っていた。犬小屋や鶏小屋もあり、叱られた時は鶏小屋に入れられたことを覚えている。今でも鶏に触るのは苦手であるが、きっとこれが影響しているのだろう。



筆者が子どもの頃の実家

当時のお祭りの様子(自宅近く)

自宅近くにあった建材店の瓦製造工場

現在の家は、筆者が小学校6年生の時に建てられたもので、父が方眼紙に図面を描いていたことを思い出す。当時、父が「新住宅」という雑誌を定期購読しており、これに載っていた「あめりか屋」などの住宅も参考にしたようだ。この頃は祖父母、父母、兄、妹、叔母、お手伝いさんの合わせて10人が生活する大所帯であり、それを象徴するような大屋根の家である。外観は3階建てのように見える。今の呼び方で言えば、9DK+納戸+ロフト(屋根裏部屋)の大きな家である。瓦は淡路島産の濃いピンク色で、全体的に昭和モダンをイメージさせる。当時としてはハイカラな家である(今でもハイカラだと思っているが)。



現在の実家

筆者が大学の頃までは、庭を挟んで南側に建材店があり、その後、店の移転に伴い南側に広い庭を造った。池も造り替えたが、現在は枯山水風の庭である。この家では、新築当時から 40 年程チン（狆）やヨークシャテリアなどの小型犬を飼っており、ヨークシャテリアの「ポンタ」や「モモ」が縁側を伝い歩きする姿が可愛く、今でも懐かしく思う。築 50 年近く経っているが、水回りを中心に数回リフォームを行い、良好な形で維持されている。現在は 80 代の母と 60 代の兄の二人暮らしであり、物置や納戸として使われている部屋も多い。筆者にとっては思い出のある家であり、今後もリフォームを繰り返しながら大切に住み継がれてほしい。

（２）熊本大学建築学科入学（建築との出会い）

筆者の長男は、建築や都市を学ぶ大学生である。長男は進路を決める時に悩んでいたようであるが、最終的には関東の大学で建築・都市・環境を学ぶようになった。筆者が建築関係の仕事をしているからなのか、姪浜での活動に刺激を受けたからなのかは定かではない。今でもこの進路を選んだことがよかったのかどうか悩んでいるようだ。高校時代に進路を決めることは難しいものだ。

長男が悩んだように、筆者も高校時代には同じような悩みを抱えていた。父が建材店を営んでいたことや、兄が建築学科を出たことが最終的には建築を志す動機になったのかも知れない。当時の建築学科は、医学部の次に偏差値が高く、丹下健三氏、黒川紀章氏、磯崎新氏など著名な建築家が活躍していた時代であり、人気の学科であった。清家清氏がコーヒー（ネスカフェゴールドブレンド）の「違いがわかる男」のコマーシャルに出ていたことも思い出す。「ダバダ〜ダバダ〜♪」と聞けば、思い出す方も多いだろう。「建築家は格好いい、女性にもてる」という印象を抱いていたのかも知れない。

筆者は、熊本大学と東京の私立大学に合格。東京に行きたかったが、学生時代に東京で苦労していた兄のアドバイスもあり、熊本大学建築学科に入学することになった。

入学して気付いたことは、当時の熊本大学の建築学科には蒼々たる先生方がいたことである。西洋建築史の堀内清治先生、プロフェッサーアーキテクトである木島安史先生、岡村幸一郎先生（共に丹下健三門下生）などの他、建築構造や建築環境の分野にも素晴らしい先生方がいた。学生の中には、こうした先生方の下で学びたいということで熊本大学建築学科に入学した者もいた。

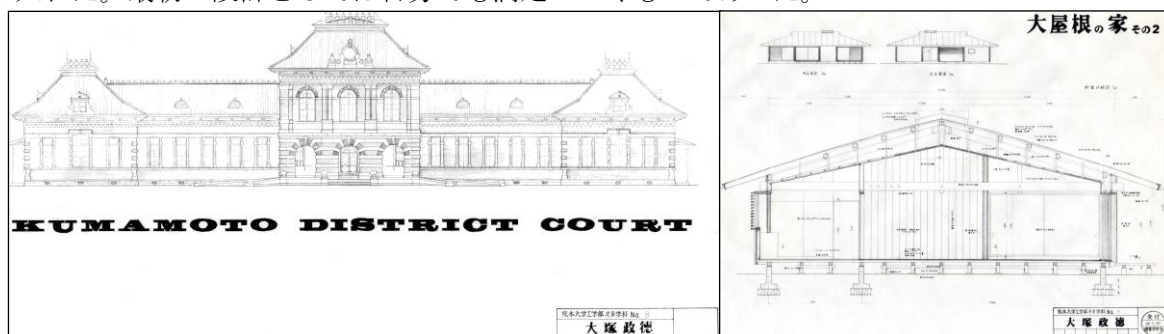


現在の熊本大学と筆者（平成 28 年6月）

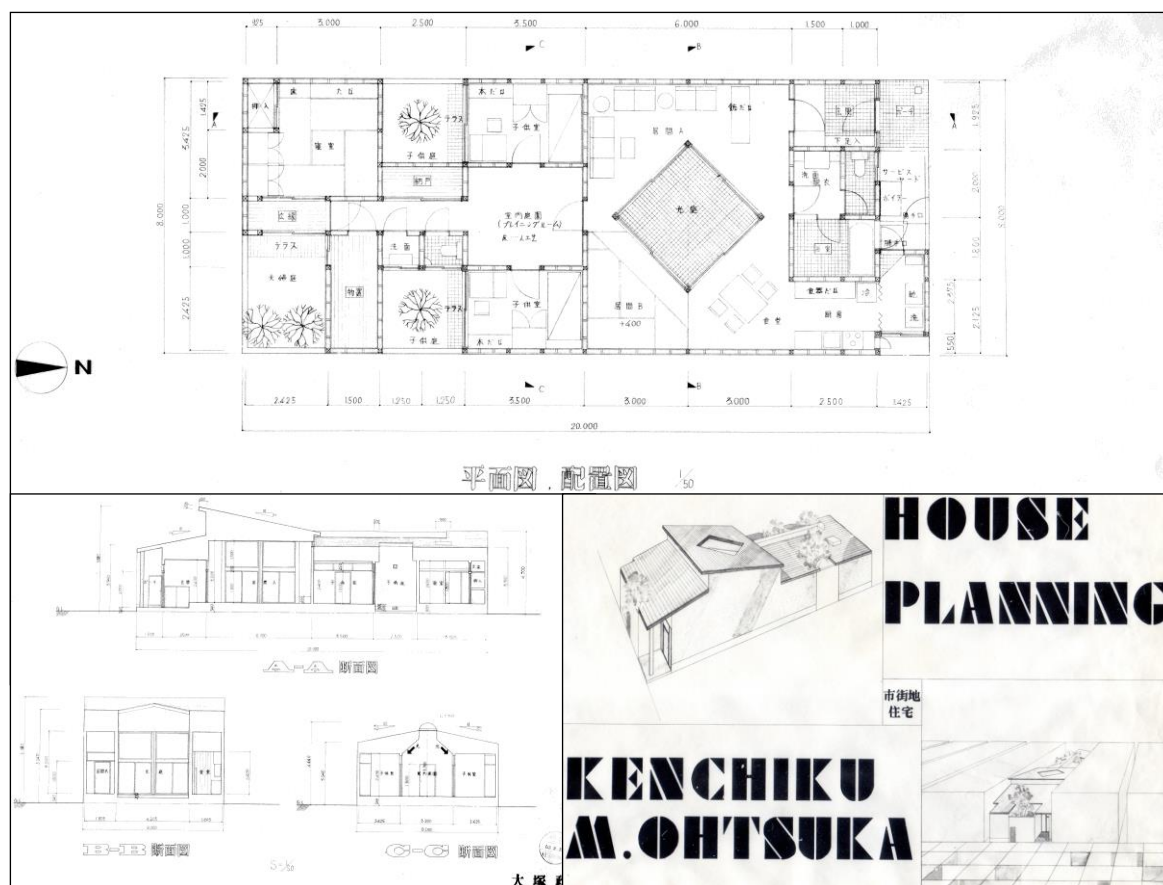
(3) 最初の設計

熊本大学の建築学科では1年次から専門科目として、西洋建築史、構造力学などがカリキュラムに組み込まれていた。2年前期で熊本地方裁判所の模写、篠原一男氏設計の「大屋根の家」の模写などを経験した後、最初の設計は2年後期の「木造住宅」であった。筆者は2つの敷地（郊外型、都市型）のうち、都市型の敷地を選択し、初めての設計に精力的に取り組んだ。間口が8m、奥行き25mのウナギの寝床状の敷地であったと記憶している。ロール型のトレーシングペーパーにスケッチを繰り返し、何度もアイデアを練り直した。

意識したのは、周辺の環境が大きく変化しても、採光や通風、プライバシーを確保できるような住宅である。そのため、平屋建の建物を敷地いっぱいに配置し、広いリビングルームやダイニングルームの中央に3m角の光庭を45度の角度で大胆に配置するなど、大小いくつもの光庭を取り入れた。最初の設計としては自分でも満足のいくものであった。



模写：熊本地方裁判所(左)、大屋根の家(右)



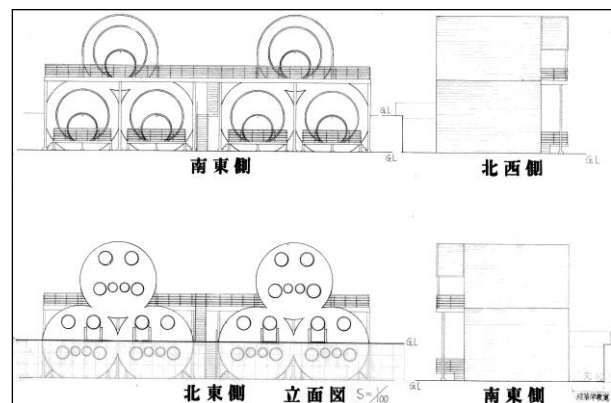
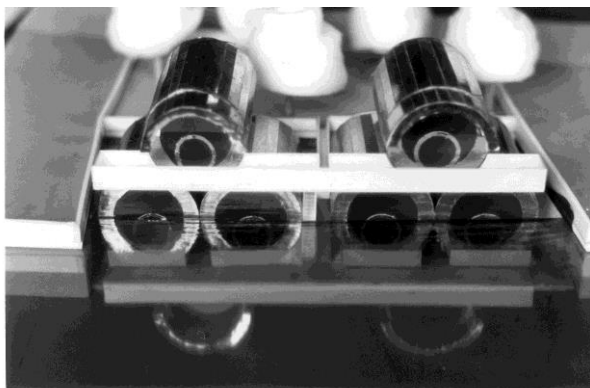
最初の設計課題(都市型住宅)

「その場所の特性を最大限に活かし、そこでしかできない設計をする」という徹底した考え方は、この住宅設計の時から身に付け始めたことであり、今でも筆者の建築やまちづくりでの哲学である。筆者は、姪浜で「地域に埋もれている身近な魅力資源の掘り起こしこそが、姪浜ならではの地域特性を活かしたまちづくり・景観づくりの土台となる」ということを常に発信してきたが、建築やまちづくりに関わり続ける限り、この哲学を譲ることはできない。

（４）楽しい設計課題

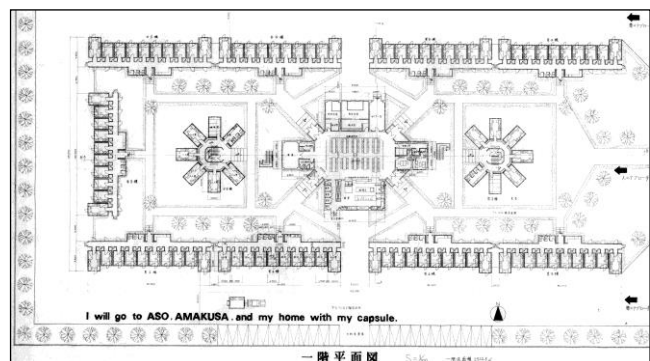
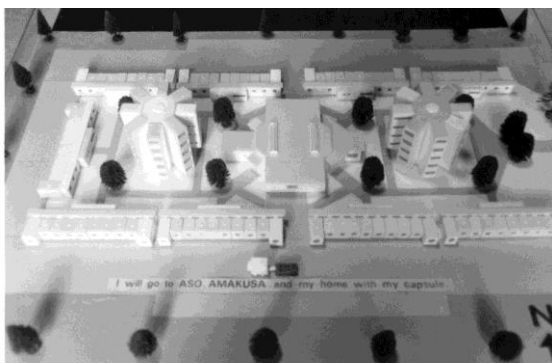
3年生になると、いろいろな設計課題に取り組むことになる。ありきたりの設計ではなく、場所性やコンセプトにこだわることで、楽しさは倍増していった。海に面した6つの別荘である

「SEASHORE WEEKEND COMPLEX」では、6つの円筒を使い、そのうち4つの円筒を海に沈め、干潮時には海に出て楽しめ、満潮時には窓越しに魚が見えるように計画した。上の2つの円筒では、満潮時に魚釣りもできる。また、海に面した南東側の大きな窓は、カメラの絞り機能をイメージし、外の明るさに合わせて光を調節できるように計画した。



SEASHORE WEEKEND COMPLEX

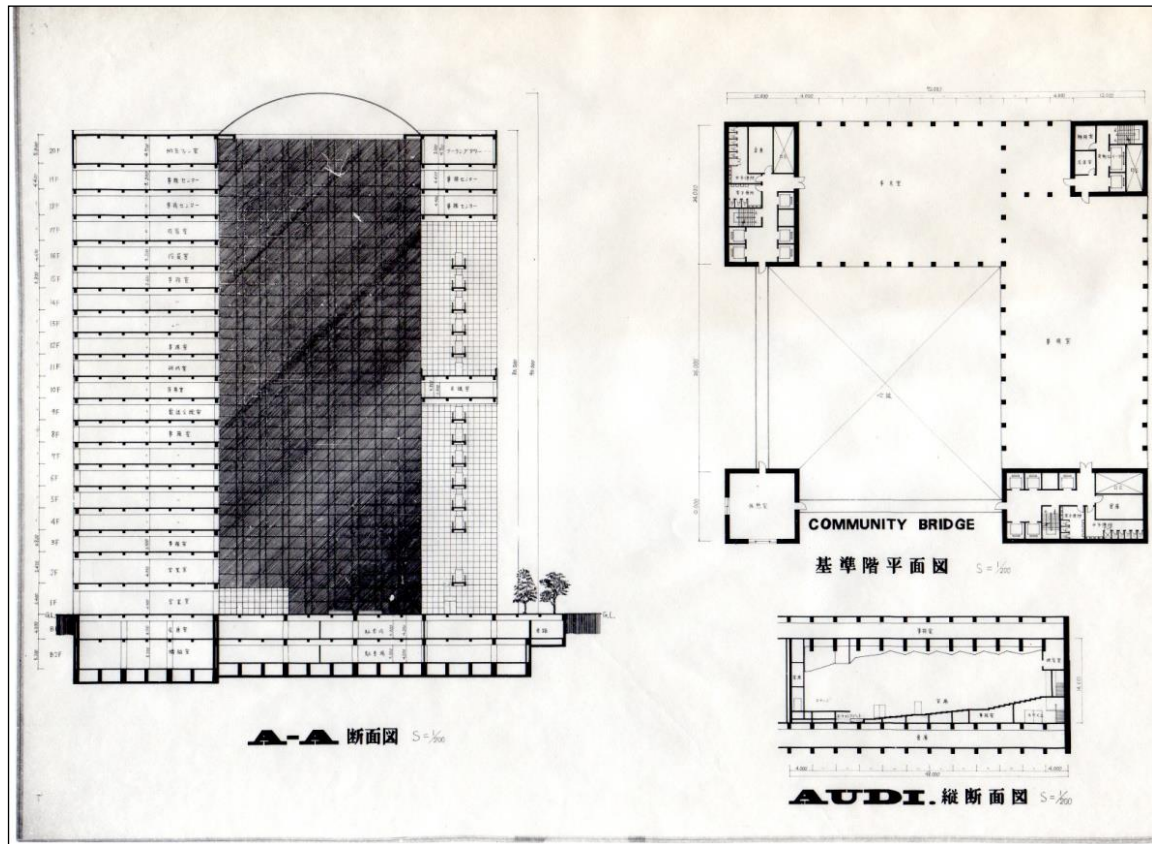
「熊本大学学生寮」の設計では、外周の1階のすべての部屋は取り外し可能なカプセル形式（タイヤ付き）とし、車で引いて移動できるモバイルハウスとした。阿蘇や天草などへの旅行の他、自宅に帰る時にも使えるように計画した。夏休みに模型を作ったが、一つひとつの部屋を粘り強く丁寧に作った。この時に模型の作り方が上達したのかも知れない。



熊本大学学生寮

また、「オフィス+オーディトリウム」の設計では、L字型のオフィスと独立したコア（休憩室

空間) にコミュニティブリッジを配するとともに、最上階に大きなガラスの屋根を架け、大規模なアトリウム空間を確保した。このブリッジを渡ることによって、同じ会社に働くという一体感が生まれることを意図したものである。



オフィス+オーデトリウム

(5) 建築への興味、建築巡り

九州には著名な建築家の作品が多く、関東や関西の学生たちも九州の建築巡りをしていた。磯崎新氏、黒川紀章氏、白井晟一氏の設計した作品などが、そのコースに入っていたようだ。当時の新聞にも「九州は現代建築の宝庫」と掲載されていた。

筆者も様々な設計課題に取り組む一方、休みを利用して建築巡りを始めた。九州にある磯崎新氏が設計した建物の大半を見て回ったと思う。福岡市内では、博多駅前の福岡相互銀行本店（※建築物の名称は当時のもの。以下共通）や3つの支店（大名、六本松、長住）、秀巧社ビルを見学した。大分市内では大分県立大分図書館、大分県医師会館、富士見カントリークラブ、北九州市内では北九州市立中央図書館、北九州市立美術館、西日本総合展示場などを見学した。大学3年生の春休みには、群馬県立近代美術館にも出かけている。

また、黒川紀章氏設計の福岡銀行本店、白井晟一氏設計の親和銀行本店、前川國男氏設計の福岡市立美術館や熊本県立美術館なども訪問した。

このように学生時代は九州の現代建築を中心にかなりエネルギーに見て回った記憶がある。ちなみにその頃使っていたカメラは、昭和51年7月発売のフジカST605で、発売当時は一眼レフとしては廉価版として販売されていた（5万円程度）。一眼レフとはいえ、当時は標準レンズ1本しか持っていなくて、広角写真を撮る場合は別の小型のコンパクトカメラを併用していた。その

後、社会人になってニコンのカメラを購入することになるが、大学時代の4年間はフジカST605を主に使っていた。愛着のあるカメラ第1号である。



福岡相互銀行本店



秀巧社ビル



北九州市立中央図書館



大分県立大分図書館



福岡銀行本店



親和銀行本店



最初のカメラ(フジカ ST605)

(6) 木島安史先生

筆者が歴史的建造物に興味を持ち始めたのは、前述の木島安史先生との出会いが影響していると思う。木島先生は、建築設計や都市計画を教える傍ら、建築評論家の長谷川堯氏といっしょに熊本の歴史的建造物の保存に取り組み、昭和49年1月～3月に熊本日日新聞の夕刊で「家は生きていた～熊本の洋館・和館めぐり」を連載されていた。筆者が熊本大学に入学したのが昭和51年であるが、熊本市内には多くの歴史的建造物が大切に残されていた。文化都市・熊本を実感で

きたのは、先生方の努力が大きかったと思う。「都市住宅 7406 (昭和 49 年 6 月号)」では、「発掘文化都市熊本」を特集しており、懐かしく読み返しているところである。



都市住宅 7406(昭和 49 年6月号)「発掘文化都市熊本」より

また、木島先生を語る時には「孤風院」は欠かせない。孤風院は、明治 41 年 (1908 年)、熊本高等工業学校の図書閲覧室 (講堂) として建てられた熊本を代表する洋風木造建築であったが、昭和 51 年 (1976 年) 老朽化による解体決定に伴い、当時熊本大学助教授であった木島先生が買い取り、現在の地 (阿蘇) へ移築し、住居として平成 3 年 (1991 年) まで利用されていた。移築後は住みながら改修を続けられ、木島先生が亡くなられてからは木島家の別荘としての利用のほか、「孤風院の会」によってメンテナンスを含めた建築教育活動の場として利用されている。

大学の講堂としての役割を終え、買い取り手も見つからなかった建物を、自ら買い取り、改修し、住居として蘇らせ、明治～大正～昭和～平成の 4 つの時代にわたり活用されていった。大学の授業で木島先生が「天井に張っていたスタイロフォームの色が変わり、友人が再度訪ねて来た時に天井を張ったのかと言われた」ことをエピソードとして嬉しそうに話されていたことを思い出す。

こうした建築への想いと行動力のある木島先生に大学時代に少しでも教わったことを今でも大変誇りに思っている。孤風院については、先生の手記「孤風院白書」として出版されている。建築に携わる方には、ぜひ読んでいただきたい名著である。熊本地震での影響が気になっていたの、平成 28 年 8 月に阿蘇に行った時に立ち寄ってみたが、外から見る限りは大きな損傷はなかったようだ。一安心である。



孤風院白書

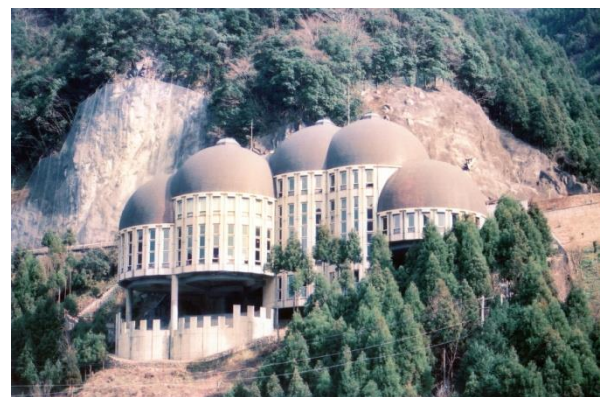


孤風院(平成 28 年8月)

また、木島先生は建築家でもあり、多くの建築を設計された。歴史性を尊重した考え方やドーム建築が印象的である。筆者は学生時代はもちろん、社会人になってからも木島先生が設計された多くの作品を見学に行った。熊本県内では上無田松尾神社、上無田公民館、球泉洞森林館、東陽村石匠館、TOTO アクアピット ASOなどを訪れた。福岡市内ではシーサイドももちの世界の建築家通りの一角に木島先生設計の商業施設があり、後述するクリスタージュを訪れる度にいつも気にかけていたものだ。また、昭和 55 年の新建築会館のコンペでは二等に入選された。その時のドーム案は今でも印象に残っている。



上無田松尾神社



球泉洞森林館

木島先生は、平成 3 年に千葉大学に移られたが、翌年の 4 月に 54 歳の若さで亡くなられた。あまりにも早すぎる死であった。なお、木島先生が書かれた著書としては、前述の「孤風院白書」の他、「半過去の建築から」「内なるコスモポリタン」などがある。機会があれば、ぜひ読んでいただきたい。



新建築会館のコンペで二等になった時の木島先生のドーム案

（７）卒業論文

筆者は大学４年次、日本建築史の北野隆先生のゼミに所属していた。北野先生は、主に近世日本建築を研究されており、研究室の学生たちもそうした研究を行っていた。しかし、隣の西洋建築史の堀内清治先生からの依頼もあり、三角西港の研究は北野研究室で行うことになり、筆者が担当することになった。平成 27 年に世界文化遺産に登録されたが、当時は存在が知られているだけで、北野先生の指導を受け、筆者が最初に研究に取りかかることになった。

三角西港は、明治政府の殖産興業の政策に基づいて、お雇い外国人のオランダ人水理工師のローエンホルスト・ムルドルによる設計で、明治 20 年（1887 年）に完成した。当時の最新の技術が盛り込まれた三角西港は、宮城県の野蒜（のびる）港、福井県の三国港と並び、近代国家の威信を懸けた明治三大築港の一つであった。有明海、不知火海の二つの海に面した三角町は、三角西港の整備により熊本県の海の玄関港として、人や物資が行き交う海上交通の要地として繁栄するとともに、宇土郡役所や三角裁判所の設置により宇土地域の行政や司法の中心地となった。

その後、港としての機能は三角港（東港）に移ったこともあり、756 メートルにも及ぶ石積み の埠頭や水路、建造物などは築港後 130 年の歴史を持ちながら、当時の佇まいを見せている。当時の都市計画がほぼそのままの形で残っているのは全国的にも珍しい。文化財的にも国際的にも価値ある生きた港として、平成 14 年 12 月に国の重要文化財に指定、平成 27 年 7 月に「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」の構成資産として世界文化遺産に登録され、港町三角のシンボルとなっている。



大学時代に研究していた頃の三角西港（昭和 57 年 2 月。大学を卒業して 2 年後の写真）

筆者は、大学を卒業して 36 年後の平成 28 年 7 月 3 日に三角西港を訪問した（当時の写真のネ

ガを調べていたら、大学を卒業して2年程経った昭和 57 年の2月に訪れていた)。石積みの埠頭や水路は当時とほとんど変わらないが、昭和 62 年の築港 100 周年を機に、当時の建造物の復元や周辺の公園整備も行われ、観光地としても賑わいを見せていた。小説家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）ゆかりの旅館・浦島屋、倉庫を改修したカフェなど明治の面影を残す建物が印象的であった。大学時代にはだれ一人として観光に訪れる者はいなかったが、雨天にも関わらず多くの観光客が訪れていた。エピソードになるが、20 年近く使っている腕時計の針が、三角西港を訪れた時に突然止まった。まるで大学時代にタイムスリップしたかのように。



現在の三角西港(平成 28 年7月)

大学の研究で筆者が行ったのは、資料収集や現地調査が中心であったが、この研究が一つのきっかけとなり、国の重要文化財や世界文化遺産に登録され、多くの観光客も訪れる港町になったことは本当に嬉しい。後に福岡市役所の仕事に関わることになる御供所や、まちづくり活動に関わることになる姪浜、どちらも筆者が関わった時には無名の地域であったが、粘り強い取り組みにより、それらの名が知られる一つのきっかけを作ったことは、三角西港と共通点があるのかも知れない。

（８）卒業設計

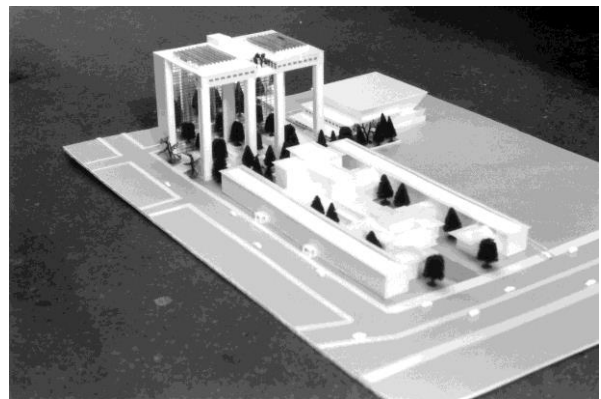
卒業研究が終わり、次は卒業設計に取り組むことになった。多くの大学の建築学科では、卒業研究か卒業設計のいずれかの選択であるが、熊本大学では「卒業設計は建築の総合的な力を身につけるのに最適である」との理由で、両方とも必修科目になっている。

卒業設計では、建物の建つ地域や場所、用途などは自由であり、各学生に委ねられている。設計に当たり、地域を取り巻く現状や問題点、課題を踏まえることは当然であるが、何よりも大切なことは設計に取り組む背景と動機、コンセプトである。多くの学生は「〇〇地域の〇〇施設」など施設ありきで考えていたようであるが、筆者は違う視点で取り組んだ。

筆者は、当時話題になっていた建築会館の建て替えを参考として、建築に携わる方々が利用する複合施設「Architectural Complex」を計画した。まず考えたことは、『4年間建築を学んで、筆者が最も体験したい建築空間は何か』ということであった。いろいろな建築巡りをする中で、素晴らしい建築空間を体験することの重要性を痛感していたからである。

国内のいろいろな建築の中から、筆者はフランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテルの活用を考えた。旧帝国ホテルは既に解体され、一部は愛知県の明治村に移築されており、現実性はなかったが、旧帝国ホテルを博物館として活用しながら、会議室、オーディトリウムなどの機能を新たに付加させていったものである。卒業設計は大学4年間の総まとめであり、現実的である必要はないと思う。いかに自分の想いを設計に込めるかである。

残念ながら当時の図面は手元には残っていない。提出に追われてマイクロ写真で保存する余裕すらなかった。ボリューム模型の写真だけが残っていた。



明治村にある旧帝国ホテル(左)と筆者の卒業設計時のボリューム模型(右)

後に、木島先生が新建築会館のコンペで二等になった時のドーム案（前述）は有名であるが、木島先生は日本を代表する建築として香川県庁舎（丹下健三氏設計）を評価しており、それを新

建築会館の案にイメージとして取り入れたということを何かの本で読んだ記憶がある（日本の伝統的な小梁や格子をコンクリートによって再現？）。何か筆者の卒業設計の考え方が先生に届いていたとしたら嬉しい。

筆者の長男も早くも大学4年生になり、卒業設計に追われている。「〇〇地域の〇〇施設」といったテーマで小ぢんまりとまとめるのではなく、大きな視点に立ち、今まで都市や建築について感じてきたことを卒業設計に反映してほしい。

コラム1 建築書との出会い

大学に入り、建築の専門図書を多く読むようになった。木島先生がお薦めの本をリストアップされていたことを思い出す。『空間 時間 建築（ジークフリート・ギーディオン著）』、『輝く都市（ル・コルビュジェ著）』、『空間へ（磯崎新著）』、『宇宙船地球号（バックミンスター・フラー著）』、『神殿か獄舎か（長谷川堯著）』などが挙げられていたと思う。鹿島出版のSD選書もたくさん読んだ記憶がある。

鴻池組に入ってから、給与の多くを本の購入に充て建築の専門書や雑誌を購入した。通勤途中の電車の中でも何回も読み返した本も多い。「新建築」や「A&U」などの雑誌の大半は処分したが、思い出の多い書籍は今でも大切に保管している。建築や都市を志す長男にも読んでもらえるとは想像もしていなかった。じっくりと読みたい名著もたくさんある。建築を志した頃の初心に返り、改めて読み返してみたい。



「参考資料1 筆者の主な年表」

2 社会人時代（鴻池組時代）

（1）鴻池組入社

次に就職の件に触れよう。今と違い、民間企業への就職の準備は大学4年生の秋からであった。大学の推薦を受けて各企業の試験に臨むことになるが、筆者は大手建設会社の設計部にチャレンジした。熊本大学の先輩である九州支店の部長の面接を経て、東京の本社での試験に臨む。学生時代の設計課題の図面も持参したが、残念ながら採用されなかった。

その後、ゼミの北野先生の紹介により、準大手の鴻池組を受験。九州支店での面接を経て、大阪本社での試験に臨む。無事内定をもらい、鴻池組に就職することになった。鴻池組は大阪に本社を置く建築工事中心の堅実なゼネコンである。

（2）設計部配属と御茶ノ水

大阪での1週間程度の研修を経て、筆者は東京本店の設計部に配属された。昭和55年4月のことである。東京本店設計部には筆者を含めて4名が配属された。

東京本店は御茶ノ水にあった。大阪の御堂筋にあった本社ビルはトラパーチンの外壁が印象的であったが、東京本店ビルはあまり印象には残っていない。御茶ノ水界隈は、学生街でもあり、明治大学、日本大学、順天堂大学などがあった。また、ニコライ堂や吉阪隆正氏設計のアテネ・フランセもあった。神田にも近く、土曜日の仕事が終わった後はみんなで神田に繰り出し、食事に行ったものだ。その後は、建築図書専門店の「南洋堂」に行くことも多かった。



鴻池組本社ビル



東京本店ビル



同期の仲間（東京本店）。筆者は3列目中央



御茶ノ水界隈の思い出の建築物：ニコライ堂（左）、アテネ・フランセ（右） ※平成29年3月撮影

設計部に所属したのは2年半程度。先輩方についていろいろな実務を教わった。ゼネコンの設計部ということで自由度は少なく、印象に残った仕事はほとんど無い。住居系地域に建築するあ

る銀行の支店で、緩衝地帯としての役割を持たせるため、道路と建築本体の間にフレームと植栽帯を提案したことがあったが、費用がかかることとゼネコンの設計に馴染まないということで却下された。2年目に筆者が最初に任せられたのは、浜松町の事務所兼住居であった。大手不動産が土地を買収したことに伴う代替ビルである。10メートル四方の敷地に建つ5階建てのビルで、後述するが、現場に配属された時はここが最初の現場となった。

ところで、平成29年3月に東京に行く機会を利用して、御茶ノ水界隈に寄ってみたが、東京本店ビルは既になく、通りの雰囲気も随分と変わっていた。これも30年の時の流れだろうか。



御茶ノ水駅前の風景(昭和55年頃)



御茶ノ水駅前の風景(平成29年3月)

(3) 寮生活とコンペ

鴻池組の大和田鴻和寮は、千葉県八千代市にあり、御茶ノ水までは船橋乗り換えで1時間半程度かかっていた。往復3時間の満員電車は、田舎から出てきた者には苦痛であった。

寮の部屋については、最初は同期の西岡君と相部屋であったが、筆者はドラフターや書籍などの荷物が多かったことから、3ヶ月後に一人部屋(6畳。トイレ、洗面所、浴室は共用)にしてもらった。部屋にはテレビも無く、就寝や読書が中心の生活であったが、寮にいる間に建築のコンペに何回もチャレンジした。入賞することはなかったが、自分の想いを組み立てていく作業は無駄にはならなかったと思う。ぎりぎりまで時間をかけて図面を作り、その日の消印が取れる東京駅の中央郵便局まで提出しに行ったものだ。その後は、きまって船橋の居酒屋で一人で打ち上げをした。若い頃の思い出である。



大和田鴻和寮の外観(左)と筆者の部屋(右)

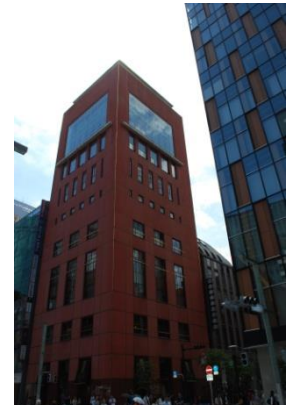
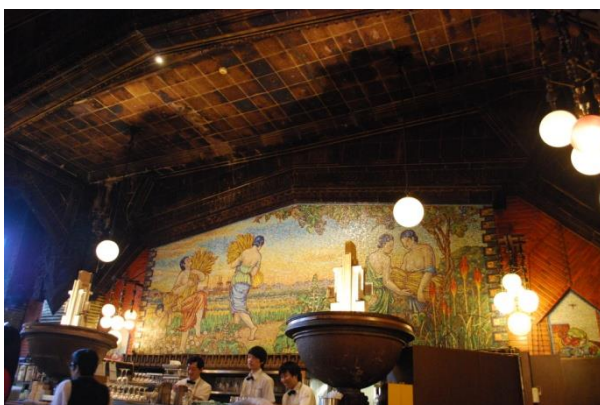


コンペへの参加

仕事が終わってからの作業で、よく頑張っていたと思う。姪浜の活動のエネルギーもこうした経験から生み出されたのかも知れない。提出した作品は審査後に受け取りに行ったが、引っ越しの際にどこかに紛れ込んで残念ながら手元には残っていない。

(4) 銀座の思い出

会社の飲み会は、御茶ノ水や神田界隈が中心であったが、二次会で銀座に行くことも多かった。鴻池組東京本店は、御茶ノ水に移転する前は銀座にあったこともあり、先輩方は銀座に行きつけのお店も多かったようだ。終電もなくなり、相乗りタクシーで寮まで帰ることもよくあった。みんな東京生活のいい思い出である。今でも銀座が懐かしいのは、こうした経験からかも知れない。とは言っても、筆者の銀座と言えば、銀座交差点の風景や有楽町マリオン、銀座ライオン（ビアホール）、伊東屋（文房具・画材専門店）、内井昭蔵氏設計の銀座対鶴館ビル、巴裡小川軒（新橋のレーズンサンドの老舗）などである。



筆者の思い出の銀座(写真は平成 26 年～28 年に撮影)

（５）建築巡り

大学在学中から建築廻りをしていたが、建築を志す者にとって東京は憧れの都市であり、東京にいる間にいろいろな建物を見に行こうと思った。社会人になったこともあり、新しいカメラを購入。ボディはニコンの FE という中級機であるが、レンズは建築撮影用のあおり止め（ゆがみ補正）機能のある 28mm の PC レンズをまずは購入した。その後も 16mm の魚眼レンズと 80～200mm の望遠レンズを購入し、3つのレンズを 20 年以上愛用してきた(今でも使用可能である)。自称「セミプロ建築写真家」でもある。写真の構図にこだわることは、建築の設計でも大変役に立った。



ニコン FE と3つのレンズ



愛用のカメラで国内外の建築巡り

このカメラでいろいろな建築巡りをした。当時、村野藤吾氏の作品に興味があり、高輪プリンスホテル貴賓館、小山敬三美術館（長野県小諸市）、八ヶ岳美術館（長野県原村）、谷村美術館（新潟県糸魚川市）などを見て回ったが、ディテールの写真をこれ程まで撮ることはなかった。村野氏は「建築らしいものを創り出したのは 60 歳を過ぎてから」と言われており、亡くなる直前まで仕事に情熱を傾けられていた。素材とディテールにこだわった職人的な手法から生み出された陰影に富む自在な造形は、独自の世界を生み出してきた。



小山敬三美術館



八ヶ岳美術館

また、「健康な家」をテーマに設計をしていた内井昭蔵氏の作品にも興味があった。銀座対鶴館ビル、桜台コートビレッジ（横浜市青葉区）、清澄寺祖師堂（千葉県鴨川市）、身延山久遠寺宝蔵（山梨県身延町）、東京 YMCA 野辺山青少年センター（長野県野辺山）など、ニコンの愛用カメ

ラを持参し見て回った。35 年程前のことであるが、今でも記憶に新しい。本当に遠くまで見学に行ったものだ。建築への好奇心旺盛の時期であった。

この他、白井晟一氏設計の芹沢銈介美術館（静岡市）や渋谷区立松濤美術館、山下和正氏設計のフロム・ファースト・ビル（表参道）、槇文彦氏設計の代官山プロジェクト、磯崎新氏設計の群馬県立近代美術館などが印象に残る。この時期は、素材とディテールにこだわった建物や、空間構成に人間味の感じられる建物に興味があったと思う。ちなみに建築巡りをする時は一人で行くことにしている。空間を体験して、自分で考えることが大切だと考えているからだ。自分の空間体験を大事にしたい。



清澄寺祖師堂



身延山久遠寺宝蔵



東京 YMCA 野辺山青少年センター



桜台コートビレッジ



芹沢銈介美術館



フロム・ファースト・ビル



代官山ヒルサイドテラス



群馬県立近代美術館

（６）歴史的建造物への興味

歴史的建造物への興味もこの頃から増してきたように思う。社会人になって２年目の５月だったと思うが、先輩方と奈良と京都に古建築巡りをした。奈良では法隆寺や薬師寺、斑鳩の里に行った記憶が鮮やかに蘇ってきた。薬師寺は西塔が再建されたばかりであり、東塔と比較すると、壁や格子の色、屋根の反りが違うのが印象的であった。２００年経つと、同じような色や形になるという。とてもロマンを感じさせる話であり、薬師寺にはこの後、愛用の PC レンズと望遠レンズを持って何回も通うことになった。



薬師寺



京都では桂離宮、修学院離宮の他、円通寺、苔寺、詩仙堂、曼殊院などに行った記憶がある。何れの建物も古い歴史があり、庭もきれいである。茶室や風景、ランドスケープにも興味が出てきたのはこの頃だろうか。いっしょに行った先輩の篠田光滋さんが嵐山の渡月橋を渡る時に、来場記念にもらった「(財)有識者文化協会」と書かれたパンフレットを誇らしげに自慢していたことを昨日のここのように思い出す。自分が有識者になったつもりだったのだろう。この後、京都には週末の休みを利用して JR の夜間バス「ドリーム号」で何度も通ったものだ。いつの季節も素晴らしい印象がある。



桂離宮



修学院離宮



曼殊院

(7) 歴史的町並みへの興味

歴史的町並みへの興味が出てきたのもこの頃だろうか。大学時代は日本建築史のゼミに所属していたが、町並みへの興味はそれほどではなかった。社会人になり、現実的な仕事をする中で、本来自分がやりたいことは何なのかを考えていたのだろう。歴史的町並み保存の実務的な手引書である「歴史的町並み事典（西山卯三氏監修）」を購入したのもこの頃である。

思い起こすと、歴史的町並みの価値が見直されてきたのは、昭和 45 年頃であろうか。筆者が中学生の頃である。当時の国鉄のキャンペーン「ディスカバー・ジャパン」は、大阪万博終了直後に「日本を発見し、自分自身を再発見する」ことをコンセプトに個人旅行拡大キャンペーンとして全国的に進められた。美しい日本の再発見をテーマにしたものである。

また、同じ時期に永六輔氏出演のテレビ紀行番組「遠くへ行きたい」も始まった。各地域の名所紹介や住民との触れ合いをテーマにした番組であり、国民の旅行への憧憬を誘った。大学時代に山口百恵さんが歌っていた「いい日旅立ち」も思い出す。高度成長時代に多くの歴史的建造物や町並みが失われてきた反省もあるのだろう。

さて、東京時代に筆者が訪れた町並みは、栃木県栃木市や埼玉県川越市の蔵の町並みなどである。栃木市は江戸時代から例幣使（れいへいし）街道の宿場町として、また舟運で栄えた問屋町として、北関東の商都と呼ばれた。黒塗りの重厚な見世蔵や白壁の土蔵群が残り、当時の繁栄振

りを偲ばせている。福岡市役所に入り都市景観の業務に関わってから訪れたことはあるが、筆者が東京にいた頃はまだ道路が拡幅される前であり、現在より古い町並みが残っていた。



栃木市の町並み(昭和 55 年 11 月)

川越の町並みも東京時代に数度訪れた。当時は舗装整備や電線類の地中化がされる前であり、今のように観光客は多くなかった。何回もの大火の末に防火性を考慮して導入された土蔵づくりや重厚な開き扉、堅牢な瓦屋根の町並みが印象的であった。古き良き物を大切にしようとした先人の知恵が詰まった建物や町並みである。関係者の方々の努力に頭が下がる思いである。

福岡に帰ってからも姪浜の活動の関係などで数度訪れているが、いつ行っても観光客が大変多い。町並みを楽しみながら、じっくりと歩いてみたい。



川越の町並み(昭和 55 年 10 月)



川越の町並み(平成 27 年 8 月)

この他、石川県金沢市の武家屋敷街や茶屋街、奈良県今井町、宮崎県飫肥町の町並みも印象に残っている。



金沢武家屋敷の町並み(昭和 56 年)



奈良今井町の町並み(昭和 56 年)

(8) 現場配属

仕事の話に戻ろう。設計部での2年半の業務を終え、今度は現場に配属されることになった。当時の藤沢設計課長に「現場に出るのなら会社を辞める」とまで言い切った。説得され、今後の勉強も兼ねて現場配属になることを了承した。多分、この頃から退社に向けた意思を固めていったと思う。

最初の現場は、筆者が設計した浜松町の事務所兼住宅であった。設計と現場の違いに戸惑いを感じることも多く、現場所長の明石さんからも厳しく鍛えられた。所長と2人の現場であり、何でもしないとイケなかった。コンクリート打設前には鉄筋を組んだり、被りを確保するためのスペーサーやサイコロを取り付けたこともある。

また、現場の帰りに明石さんや同期の事務の空井君と新橋の牛タン屋によく行ったことを覚えている。その牛タン屋で工務監督の位寄さんとお酒を飲んだこともあるが、息子さん(位寄和久さん)が早稲田大学の建築学科で学んでいるという話も聞いた。その息子さんが平成4年から熊本大学で教鞭を執ることになるのも何かの縁であろうか。

浜松町の現場のコンクリートが打ち上がった頃に、次の現場の話が来た。今度は、神奈川県住宅供給公社の分譲マンション(横浜若葉台団地)で、施工図担当として行くことになった。14階建ての塔状のマンションである。比較的大きな現場で、スタッフも筆者を含めて10名程度いたと思う。この現場では、外観が単調にならないように建物の分節化を図るため色を使い分けたが、その頃から「環境色彩」という概念が取り入れられたようだ。環境色彩の草分け的存在である吉田愼悟氏の本を購入し勉強したことを覚えている。この現場で仕事をした時期は、お昼休みにNHKのドラマ「おしん」を放送していた時期でもある。懐かしい。月日の経つのは早いものだ。

この頃は、さすがに千葉県八千代市の寮から横浜市の現場まで通うのは難しいということで、東京都荒川区の町屋に日当たりの悪い低家賃のアパートを借りることになった。地下鉄千代田線を利用し、表参道で東急田園都市線に乗り換え、青葉台からバスで若葉台の現場に通った。電車もバスもたいてい座ることができ、週末に神田の三省堂で買い込んだ建築の本をひたすら読んだものだ。



開発が始まった昭和 50 年代の若葉台団地(若葉台まちづくりセンターのホームページより)



最近の若葉台団地(若葉台まちづくりセンターのホームページより)

この現場の施工図の作成も終わり、再び浜松町に戻り、今度は不動産会社の事務所ビルの現場の施工図を描くことになった。ここも比較的規模の大きな現場でスタッフも 10 名程度いた。杭打ちや地下工事を行っている間に図面を仕上げていくことになるが、オーナーの意向もあり 1 階部分のエントランスやホールなどの共用部のデザインがなかなか決まらず、修正を繰り返していた。ここでは、2つの小規模な代替ビルの施工図も担当し、忙しい日々を過ごした。



浜松町の現場(不動産会社の事務所ビル)

後述するが、この現場事務所で宗像剛氏と知り合うことになった。宗像氏は筆者と同じ年であるが、最高裁判所を設計した岡田信一設計事務所で設計業務を経験した後に鴻池組に入社した。父親が福島県郡山市で建設会社を営んでいるということで、鴻池組にも経験を積むために来ているのだと思う。宗像氏とは28年後に再会することになるが、再会については後で触れよう。

(9) 荒川区町屋での生活と篠田光滋さん

ここで随分お世話になった篠田光滋さんについて触れたい。篠田さんは設計部で建築構造を担当されていた。とても勉強家であり、いつも構造の本を手にしていた。篠田さんは、筆者が田舎から出てきており頼りないと感じたのだろうか、入社時からよく面倒を見てくれた。生まれも育ちも埼玉県でありながら、大の阪神ファンで「巨人、大鵬、卵焼き」に対抗していた。後輩の榊原君が大の巨人ファンで、毎朝、巨人びいきの報知新聞を買ってきて、朝から野球の話で盛り上がっていた。また、山登りが趣味でいろいろな山に登っていた。筆者も奥多摩や丹沢山地の蛭ヶ岳に連れて行ってもらったことがあるが、山の上で食べるラーメンの味は格別であった。



奥多摩登山(中央が筆者。右が篠田さん)



丹沢登山

篠田さんとの付き合いは、筆者が現場配属になってから加速した。篠田さんが荒川区町屋に住んでいたこともあり、筆者も比較的交通の便の良い町屋に住むことになった。六畳一間の居室の他に、トイレや洗面、小さな流し台があった。北向きに大きな窓があったが、隣の建物の影響でほとんど日が入らず、東側の洗面所を通して入ってくる光が頼りであった。六畳の部屋は、ドラフターや書籍を置くと、布団を敷くのが精一杯であった。良い居住環境とはいえなかったが、家賃2万数千円程度だからやむを得なかった。

町屋は下町であり、古いコミュニティが息づく地域で、昔ながらの銭湯やお店もあった。もんじゃ焼きのお店も多かった。毎日の夕食は町屋駅周辺で外食。駅前の定食屋さんや高架下のラーメン屋さん、住宅街にある中華料理屋さんによく通ったものだ。また、仕事が休みの日曜日は、駅近くの喫茶店でモーニングを食べた後、神田の三省堂に出かけ、建築の専門書を購入した。三省堂では3年間で100万円以上使ったのではないだろうか。がむしゃらに本を読んだ記憶がある。

ところで篠田さんかというと、2Kのアパートに奥さんといっしょに暮していた。筆者の一人暮らしを気にかけてくれていたのか、よく食事に招待してくれた。埼玉県吉川市に新居を建ててからも、週末にはよく出かけて行ったものだ。

筆者が鴻池組を退社し福岡市役所に入った後も、東京出張の際にはよく会って食事をした。筆者の結婚式の時にも夫婦で来ていただいた。残念ながら平成 19 年 3 月に病気のために亡くなられた。訃報が届いたのは、筆者が都市景観室の仕事で韓国の金海（きめ）に行っていた時である。ちょうどこの時から姪浜でのまちづくり活動をスタートすることになった。これも何かの縁なのだろうか。

さて、この活動記録を書いている時に久しぶりに町屋を訪問したくなった。そのため、平成 28 年 10 月末に南千住に行く機会を利用して町屋にも 30 年振りに寄ってみた。都電や高架下のある風景はあまり変わっていないかったが、駅周辺や幹線道路沿道には高層のマンションが建ち、様変わりしていた。

一步路地に入ると昔の名残は感じられたが、筆者がよく利用したお店や銭湯などは大半がなくなっていた。土曜日の昼過ぎであったが、人通りもほとんどなく、寂しい印象を受けた。90 歳近いご老人に話しかけてみたが、「町屋も随分変わったよ。昔のお店や銭湯もなくなり、知っている人も減ってきた。」と話していた。その後、地下鉄町屋駅に戻ろうとしたが、どこを歩いているのか分からなくなった。路地の多い町屋は、姪浜と似ていると改めて感じた。筆者は昔からこういう場所が好きだったのかも知れない。



都電や高架下のある風景



幹線道路から一步入った路地のある町並み

30 年振りの町屋(平成 28 年 10 月)

(10) 最後の現場、鴻池組退社

現場の話に戻ろう。浜松町の現場の施工図も描き終え、次は埼玉県川口市にあるマンションの現場に行くことになった。昭和 60 年の 6 月頃である。ここは筆者を含めてスタッフ 5 人の現場であった。筆者はここで設計監理をされていた設計事務所の牧野さんと知り合った。牧野さんは構造に詳しかった。昔は鉄筋の職人さんもしていた時期もあったという。最初は厳しい印象があったが、懐に飛び込んでいくと何でも教えてくれた。「現場は大変だけど、今、図面を描く人間が踏ん張れば、全体の工期やコストの縮減につながる」という言葉を今でも覚えている。遅れていた図面の作成を例に挙げて発した言葉だったのだろう。

この頃、親に内緒で福岡市役所の試験を受けた。第一次試験は昭和 60 年の 7 月であった。福岡大学の高宮校舎で受験したのを覚えている。第一次試験に無事合格し、8 月 12 日に第二次試験を受験。試験を終えて、東京に戻る新幹線の中で日航機の墜落事故を知った。町屋のアパートに帰りテレビをつけると、そのニュースばかりであった。

お盆明けに最後の試験として健康診断があったこともあり、それに合わせて再度帰省。この時に初めて親に福岡市役所受験のことを報告した。鴻池組にずっと勤めると思っていた両親は、この時どう思ったのだろうか。数年後、「福岡市役所に入ってよかったね」と言ってくれた。

現場の岡橋所長に「この現場を最後に退社したい」と伝えたのは、その年の暮れだったと思う。現場も一段落する翌 2 月中旬で退社。同期社員や現場関係者で退職祝いをしてくれた。その時にいただいた色紙は今でも大事に保管している。こうして 6 年間の鴻池組生活を終了。ちなみに退職金は 30 万円。鴻池組の皆さま、大変お世話になりました。

なお、この活動記録を書いている最中に写真の整理をしていたら、福岡へ帰る直前に高崎市にある群馬県立近代美術館を訪問しているようだ。磯崎新氏の代表作の一つである。大学時代と鴻池組に就職した直後に見に行った記憶があるが、東京を離れる前に再訪したくなったのだろうか。四角のキューブの中の縮小されたキューブが今でも印象に残っている。この手法は、福岡にあった秀巧社ビルでも見ることができた。



思い出の群馬県立近代美術館

(11) 東京から福岡へ

鴻池組を退社後、福岡へ帰ることになるが、新幹線で途中下車しながら実家のある行橋へと向

かった。最初に途中下車したのは名古屋で、まだ見ていなかった伊勢神宮を見学した。この頃は、昭和 48 年に第 60 回の式年遷宮が行われてから 13 年の時であり、次の遷宮に向けての準備が始められていた頃であろうか。式年遷宮は 20 年に一度宮地を改め、社殿や神宝をはじめ全てを新しくして、大御神に神殿へ遷ってもらうお祭りであり、持統天皇 4 年（690 年）以来 1300 年以上にわたり続けられている。20 年に一度行うことで、建築技術の継承の役目も果たしていると言われている。最近では平成 25 年 10 月の第 62 回目の遷宮が記憶に新しい。荘厳な雰囲気とともに、建築の原点に返ったような気がした。結界などは日本らしい空間である。

次は京都で下車し、奈良の室生寺に向かった。自然豊かな山中に位置する、気品のあるお寺である。鴻池組の先輩である大隅さんが大好きだったお寺で、寮の大隅さんの部屋で五重塔の写真を見たことがある。五重塔とシャクナゲの組み合わせが印象に残っていた。五重塔は、法隆寺に次いで日本で二番目に古い塔である。前から見ておきたかった建物であるが、ようやく対面することができた。高さは 16m 程度の小さな塔であるが、通常は上に行くに従い小さくなる屋根の出が、1 重目と 5 重目であまり変わらないため、重厚感を感じさせる。

その後、平成 10 年 9 月に奈良地方を襲った台風 7 号の強風により、高さ 50m ほどの杉の巨木が倒壊し、室生寺のシンボルである五重塔に著しい損傷を与えた。しかし、翌年から復旧工事を行い平成 12 年に無事終了し、今までの姿に蘇った。また機会を見つけて見に行きたい。全国の五重塔巡りもいいかも知れない。



室生寺の五重塔

最後の下車地は倉敷で、伝統的な町並みと大原美術館を見学した。当時は今のように道路や町並みも整備されておらず、まだ素朴な町並みであったと思う。観光客も今ほど多くなかった。後で行くことになるが、ドイツのローテンブルクに似たような印象を持っている。多分、倉敷の町並み保存の提唱者である大原総一郎氏が「倉敷を日本のローテンブルクにしよう」と言っていた言葉が記憶に残っていたのだろう。また、倉敷は建築家の浦辺鎮太郎氏が愛した町並みでもある。

倉敷には 27 年後の平成 25 年の 9 月の「全国町並みゼミ」で再度訪れることになるが、長い間、地域や行政が一体となって守り、育ててきた町並みである。みんなが共通の想いを持っているの

は羨ましい。



倉敷の町並み(昭和 61 年3月)



倉敷の町並み(平成 25 年9月)

(12) 最初の海外旅行

福岡市役所に入るまでの1ヶ月を利用して、海外旅行を考えていた。最初はガウディの作品を見るためにバルセロナに行く予定で建築ツアーに応募したが、最小催行人数が集まらずに中止。急遽、他のツアーを探し、ギリシャ、イタリア、エジプトなどの古建築を見て回るようになった。この頃の海外の出来事としては、フィリピンで女性のコラソン・アキノ氏が大統領になったことが挙げられる。もう30年以上も前のことである。エジプトではカイロで何かの事件が起こり、筆者がエジプトに行くことに対して両親が少し心配していたことを思い出す。

さて、28歳にして初めての海外旅行であるが、今では懐かしい南回りルートで行くことになった。経由地は正確には覚えていないが、香港、バンコク、バーレーン経由でアテネに降り立ったと記憶している。経由地では燃料補給のため、機内から降りることになるが、荷物は機内に置いていこう言われ、大事な荷物がなくならないか不安であった。北回りルートもアンカレッジ経由の時代である。若い方々は知らないかも知れない。

アテネでは、やはりパルテノン神殿が強烈な印象として残っている。これはドーリア式（ドリス式）の神殿であるが、ドーリア式は古代ギリシャ建築における建築様式（オーダー）のひとつであり、イオニア式、コリント式と並ぶ3つの主要なオーダーに位置付けられている。大学で学んだことを実際に現地で見ることになるが、感激したことを今でも覚えている。また、エーゲ海に浮かぶ島々の統一された集落景観も印象的であった。ユーロが導入される前のギリシャの通貨

単位であるドラクマも懐かしい。



パルテノン神殿



エーゲ海に浮かぶ島の集落景観

イタリアではミラノのガレリア、ベネチアの運河、サン・マルコ広場、リアルト橋、フィレンツェの街並み、ローマのコロッセオ、パンテオンなどが印象に残っている。ポンペイの遺跡にも足を伸ばした。イタリアも北部の都市と南部の都市で印象が大きく異なっていた。ミラノで買ったバッグは10年以上使っていた。ベネチアで買った赤いベネチアングラスは、暫くリビングルームに飾っていたが、今は実家の倉庫にしまっている。いつ日の目を見るのだろうか。この時にベネチアの建物の立面図を並べた街並みポスターを購入したが、街並みへの興味を深めるきっかけになったと思う。



ガレリア(ミラノ)



運河とゴンドラ(ベネチア)



フィレンツェの街並み



街並みポスター(ベネチア)



コロッセオ(ローマ)

エジプトは、車とラクダが共存する不思議な国であった。ピラミッドは「いつ頃」「どのような労働力によって」造られたかと言う点についてはおおむね解明されているようであるが、「なんのために」「どのような建築方法で」造られたかについては定説が無い。「王墓説」「日時計説」「穀物倉庫説」「宗教儀式神殿説」「天体観測施設説」など様々な説があるが、王墓説が強い。ということで、最初の海外旅行は古典建築を巡る旅であった。



ピラミッド



コラム2 ベネチア再訪

最初のヨーロッパ旅行から2年も経たない昭和62年10月に、都市形成史に興味のあったベネチアを再度訪問した。今回はウィーンからの寝台列車で到着後、博物館見学などの観光を済ませ、サン・マルコ広場で自由時間を楽しんだ。今回も特産のベネチアングラスと刺繍、街並みのポスターを購入し、夕食前にゴンドラ船に乗船した。何度来てもイタリアらしい場所だと感じた。ベネチアに憧れたのは、歴史作家の塩野七生氏が執筆したイタリアの古代の歴史小説や法政大学の陣内秀信先生の著書を読んでいたことが影響しているのかも知れない。ベネチアの歴史は興味深い。



サン・マルコ広場

3 福岡市役所時代

(1) 福岡市での生活スタート

福岡市役所に入る前に住まい探しのため、福岡市を訪れた。地下鉄沿線の西新か唐人町周辺で検討したが、いくつかの候補の中から、唐人町駅から徒歩1分の1Kのワンルームマンションに決定した。ここに1年間住むことになるが、天神や大濠公園からも近く、商店街もすぐ近くがあり便利で住みやすかった。週末の夕食や買物、調髪は商店街で済ませることが多かった。

また、唐人町はお寺も多く、とても庶民的なまちである。毎年11月の大相撲の九州場所では、近くのお寺が支度部屋として使われていた。ここも唐津街道沿線のまちである。その後、姪浜のまちづくり活動でお世話になる版画家の二川秀臣氏のご先祖が住んでいたまちでもある。活動記録を書いている現在、いろいろな地域や人とのつながりを感じるのは、今まで精力的に活動してきた証であろうか。



現在の唐人町(平成28年12月)

さて、東京での6年間の生活を終え、福岡市にきた時の印象について触れよう。大学時代までは入院していた祖父の見舞いや買い物などで時々来ていたが、筆者にとっての第一印象は、博多駅前の福岡相互銀行本店の赤い砂岩の外壁とシンボリックな外観であり、天神の福岡銀行本店の巨大な吹き抜け空間であった。あくまで建築的な視点での印象であった。実際に住み始めて気が付いたことは、「海や山に近く、都市がコンパクトにまとまっていること」「通勤時間が東京時代の1/3程度であること」「食べ物が美味しいこと」などであった。



筆者にとっての福岡の第一印象: 福岡相互銀行本店(左)、福岡銀行本店(右)

（２）福岡市役所入庁、住宅供給公社配属

福岡市役所に入庁したのは、昭和 61 年（1986 年）4 月である。筆者が 28 歳の時である。職員研修所での約 1 ヶ月間の研修を終え、4 月下旬に外郭団体の福岡市住宅供給公社建築課に配属された。

当時の住宅公社は、住宅の分譲が業務の中心であったが、かなりの数の在庫を抱えていた。マンションでは香椎浜ハイツ、若久ハイツ、小戸ハイツ、戸建住宅では美和台、香椎宮の台などである。そうしたこともあり、建築課に在籍した 3 ヶ月間は、売れるような住宅プランの検討をしていた。その後、すぐに営業課へ配属されることになったが、同じ営業部ということで当時の岡部営業課長が声をかけてくれたのだと思う。

営業課で主に担当したのは、まだ在庫のあった若久ハイツ、小戸ハイツ、香椎浜ハイツの販売である。在庫住宅には、価格設定や建築プランなどの問題があったと思う。3 年程で人事異動のある役所では、民間事業者と張り合うのは難しく、経験とセンスが必要と感じていた。筆者はいろいろな顧客と接する中で、顧客のニーズを把握し、次の住宅の企画や設計に活かすことになった。岡部課長はそこを狙っていたのだと思う。岡部課長の住宅を販売する情熱は素晴らしく、早朝のランニングを兼ねて販売用のちらしを各住宅の郵便受けに投函されていた。まさに民間の営業マン並みというか、それを超えていたのではないだろうか。

筆者はこの頃、結婚が決まり、新しい住まいを探すことになった。公社で在庫のあったマンションや戸建住宅を薦められ見学に行き、いろいろ検討したが、購入を見送った。その後、住宅情報誌で見ていた姪浜駅から徒歩 6 分程度の民間のマンションを見学。利便性や眺望も良く、12 階の 3 LDK の部屋を購入することになった。当時は営業課に在籍したこともあり、民間のマンションを購入したことについては、しばらくの間黙っていた。ただ、これが姪浜のまちづくりに関わることになる最初のきっかけになったのかも知れない。

9 ヶ月間の営業課での業務を終え、再び建設課（組織変更で建築課⇒建設課）に戻り、主に美和台の分譲住宅を担当した。美和台は土地を売って、顧客に住宅会社を決めていただき、顧客の希望に沿って住宅を建てる「売り建て形式」であった。土日には、営業課の職員といっしょに現地の販売センターに行くことも多かった。図面や書類の審査、建築確認申請の手続き、現場監督など業務量としては結構多かったと思う。



昭和 62 年～平成 11 年まで筆者が住んでいた姪浜のマンション(平成 28 年 12 月)

（３）シーサイドももちクリスタージュ

住宅公社の３年目は、美和台だけでなく、新たな住宅地として泉けやき台を担当。泉けやき台は公社が予め決めた住宅会社と協議して住宅を建て、販売する「建て売り形式」で、全住宅のプランを配置図に貼って、全体の配置や窓の位置を調整したり、道路側の立面図を張って全体的にどのような街並みになるのかを検討しながら進めていった。また、外構を統一したイメージとしたり、通りごとにシンボルツリーを決めたりした。公社としては今までにない取り組みであり、販売も順調であった。多くの在庫を抱え経営状況が悪化していた公社としては、香椎浜ハイツフレックスがマンションの再起第一戦であったのに対し、戸建住宅では泉けやき台が再起第一戦であった。

３年目の終盤からは、シーサイドももちの住宅地開発の仕事にも関わった。戸建住宅とマンションがあったが、筆者はマンションを担当することになった。筆者の市役所での思い出の仕事の一つである「シーサイドももちクリスタージュ」である。

筆者に関わり始めたのは、基本計画が終わり、基本設計が始まる頃である。基本計画では全体のコンセプト、戸数、階数、配置イメージなどが大まかに検討されており、基本設計では配置計画、建築計画、構造計画、設備計画、外構計画、景観計画などを詰めていくことになった。設計のパートナーは福岡では著名な三浦紀之建築工房であり、担当者は高嶋義文氏であった。工事監理も含め、三浦さんや高嶋さんとの付き合いは３年以上に及ぶことになる。ちなみに三浦紀之氏は、磯崎新氏の設計事務所に勤め、在籍中は北九州市立中央図書館や福岡相互銀行本店などを担当されていた。

基本設計では、全体のイメージや景観計画を大切にしながら、配置計画や住宅のプランなどを公社全体で検討していった。今までの福岡のまちづくりは博多湾に背を向けてきたが、シーサイドももちでは博多湾への眺望など博多湾に近いという特性を最大限に活かすことが求められた。例えば、建築計画においては、エレベーターや階段を二戸一形式にすることで、北側の居室からの眺望の確保が可能となった。また、冬は日当たりの良い南側の居室をリビングルームとして使い、夏は眺望の良い北側の居室（寝室）をリビングルームとして使う「リバーシブルリビング（ダブルリビング）」も採用し、これを積極的にPRしていくことになった。



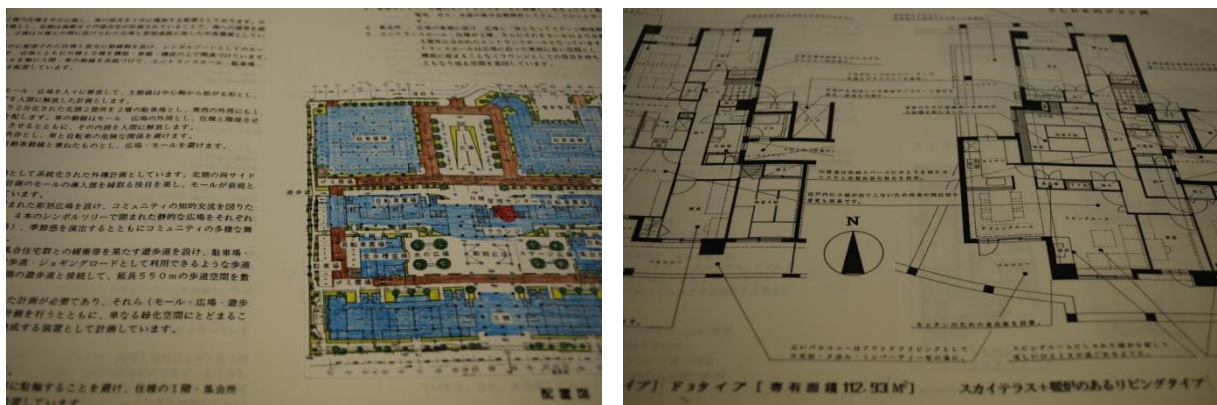
基本設計の模型写真

クリスタージュでは、建築計画はもちろん、景観や外構計画など、あらゆる面で今までの公社住宅にはないグレードやきめ細やかさが求められており、筆者は建設課の担当者として情熱を持って仕事に取り組んだ。

基本設計が終わり、実施設計途中で「構造」と「高規格住宅」の2つの建築評定の申請も行った。構造評定は高さが45mを超えたため、低層部の吹き抜けにバツレレスを数箇所入れるなどの対応を求められた。かなりのコストアップにつながったと記憶している。

また、高規格住宅は住宅金融公庫（現住宅金融支援機構）の制度であり、顧客が金融公庫の融資を受ける際にかかなりの割り増しがあった。高規格住宅では建築全般にわたり質の高さが求められたが、クリスタージュでは当初から高規格住宅の基準に近い内容で設計を進めており、暖房設備以外に新たに付加するようなものはほとんどなかった。250戸を超える住宅全体を提案型の高規格住宅にした住宅は、全国的にもほとんど例がなかったのではないだろうか。

構造評定、高規格住宅評定とも平成元年の秋に日本建築センターの評定を受け、次のステップにつなげていくことになった。



「高規格住宅」の建築評定の資料

その後、各種の申請手続きも終わり、実施設計も佳境に入っていた。当初は、先行して建築・販売していた住宅・都市整備公団（現 UR 都市再生機構）のマンション「イーストステージ」を参考にして、販売価格を120万円／坪で考えていたが、全戸提案型の高規格住宅としたこと、構造評定への対応、建築資材（特に鉄骨や鉄筋）の高騰、設備関係のグレードアップなどにより、積算すると販売価格は160万円／坪程度になっていた。この価格だと販売は難しいということで、コストダウンを図るため、工事発注まで厳しい調整が続いた。

まずは、仕上げや設備関係のグレードダウンを中心に減額項目を検討。外観のデザインを特徴付けているフレームも一部減額対象とした。見積もりについても、役所単価ではなく、業者見積もりを参考にしながら見直しを進めていった。入札用の設計書（積算書）を作成する前は、三浦建築工房の高嶋さんと3日間連続で徹夜したこともある。一度家に帰り、夕食と入浴を済ませ、仕事に戻ったことも数回ある。ストレスで昼食をほとんど食べることができなかったこともある。若い頃で無理が効いた時であるが、役所生活で一番辛い時期だったかも知れない。

その後入札を経て、鴻池組を中心とした共同事業体が施工業者として決定した。鴻池組は筆者が以前勤めていた会社であり、これも何かの縁なのだろうか。工期は平成2年2月から平成4年4月の26ヶ月である。壱番館は16階建のSRC造で156戸、弐番館は7階建のRC造で98戸、

全体で 254 戸である。工事費は最終的には 70 億円を超えていた。



実施設計の模型写真

工事は、杭打ち工事から基礎工事、鉄骨工事、鉄筋工事、コンクリート工事など順調に進んでいった。この間、営業課では販売価格、募集時期の検討や広告会社の選定などを進めていったが、建設課も同じ営業部ということもあり、いっしょに検討に加わった。営業課の担当は上野孝雄さんで、筆者も上野さんとペアを組み建設課の枠を超えて業務に取り組んだ。一番苦労したのは、まだ工事用の図面が確定していない段階で、販売用パンフレットの図面をチェックしないといけないことだった。設計図そのものも見直す余地があり、スケール 1/50 の図面と 1/100 の図面を相互に見直しながらパンフレットのチェックも進めていった。特に、ドアの開き勝手、コンセントやエアコンの位置などを入念にチェックし、施工図に反映させていった。



販売用パンフレット

モデルルームがオープンし、販売が始まったのは、平成 2 年の夏である。来場者が殺到し、冷房を入れていたモデルルームでも汗だくになって案内したことを思い出す。設計から工事発注まで苦労したが、多くの方々に来場いただき、その苦労も吹き飛んだ。クリスタージュのコンセプトやプランについてアドバイスしていただいたフランソワーズ・モレシャンさんを案内したこともある。よかトピア通りに面した工事現場の仮囲いにクリスタージュのロゴマークが描かれていたが、自家用車でこの前を通ったり、パンフレットを見たりする度に、2 歳になったばかりの長女が「パパの家」と叫んでいたことを思い出す。



モデルルーム



モレシャンさんを案内(左が筆者)

クリスタージュの募集には筆者も分不相応ながら申し込んだ。壱番館の7階の東側の角部屋だった。倍率は70倍程だった。一番倍率が高かったのはモデルルームと同じタイプでちょうど700倍。全体的には平均35倍。東京ではバブルが弾けていたが、福岡ではまだバブルが続いていたのかわからないが、信じられないほどの人気だった。担当者としては、嬉しい限りである。

募集も終わり、工事も順調に進んでいった。製品検査などにも何回も行った。外壁タイルの検査では愛知県へ、ステンレスドアの検査では福島県へ、ガラスブロックの検査では滋賀県へ、樹木の検査では熊本県や鹿児島県へ行った。いろいろな業者さんの協力があつて建物がつくられていくことを改めて感じた。

躯体工事も終わり、仕上げ工事に入っていくと、筆者も現場に行く回数が増えていった。顧客に選んでいただいた内装の色彩やオプションの確認も入念に行った。現場では細かい部分までチェックしたが、すべては顧客のためである。現場の竹内所長や中島副所長には、いろいろと無理を聞いていただいた。設計監理の高嶋さんには現場と公社の調整をしていただいた。



韓国からの視察(右から2番目が筆者)



平成3年頃の筆者

工期は平成4年4月までであったが、終盤の2月から3月にかけては雨天の日も多く外部の仕上げ工事が思うように進まず、少し遅れ気味であった。足場が外れ、クリスタージュがその美しいフォルムを現し始めたのは、その年の3月である。よかトピア通りから見た時の感動は忘れられない。すべての足場が外れた時の印象は、クリスタージュの名の通りまさに「水晶」であった。その後も外構工事や植栽工事は続いていった。筆者は4月に別の職場に異動することになり、そ

の後の入居者の内覧会や手直しの対応については、後任の増永さんと樗木さんに任せることになったが、随分と迷惑をかけたことと思う。

福岡市役所に入って初めての職場となる公社に6年間在籍したが、クリスタージュを担当させていただいて感謝している。市役所生活の中でも、筆者の思い出の仕事の一つである。お世話になったすべての関係者の皆さまに厚く御礼申し上げたい。

工事が終わり竣工写真をもらったが、自分でも愛用のPCレンズと魚眼レンズ、望遠レンズで撮影した。一枚一枚の写真が思い出である。筆者が家族を連れて完成したクリスタージュを案内したのは、5月であった。家族に筆者の想いを伝えることができた。こうして、家族の支えがあってこそ「パパの家」は無事竣工を迎えた。



竣工直後(平成4年6月)

クリスタージュはその後、「住宅月間建設大臣賞」や「福岡県建築住宅文化賞」を受賞した。担当者としてとても光栄に思う。また、管理組合に引き継がれてからも、まちづくりや住宅についての当初の考え方を継承し、とても大事に使っていただいていることを嬉しく思う。筆者は隣の

愛宕浜に住んでいることもあり、西鉄バスや対岸の愛宕浜海浜公園、室見川など、いろいろなアングルからクリスタージュを見ることができる。筆者にとっては、いつまでも気になる建物であり、家族に誇れる建物である。



よかトピア通りから見る



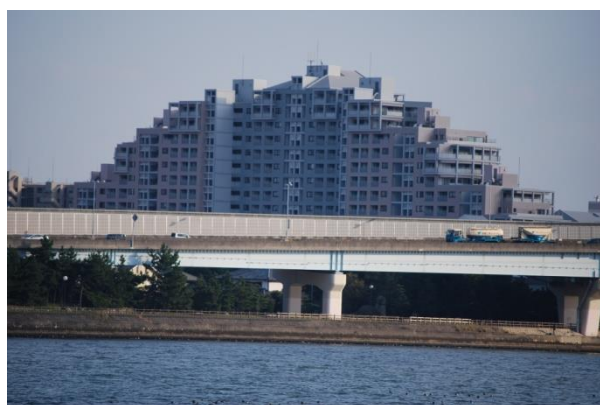
北側の戸建住宅地区から見る



福岡タワーから見る



愛宕神社から見る



西福岡マリナタウンから見る

(いずれも平成 28 年 11 月～12 月)

（４）都市景観室配属とシーサイドももち都市景観形成地区の指定

住宅公社での６年間の仕事を終え、地下鉄３号線沿線のまちづくりを１年間担当した後、都市景観室に配属された。平成５年４月のことである。都市景観室に異動になる直前、組織変更で交通局に２０日間ほど在籍したが、当時の係長に交通局の施設を案内してもらった時に、博多部御供所の聖福寺にも連れて行ってもらった。都心部にこれほど歴史と静寂のあるお寺があるとは知らなかった。それも住宅公社の近くではないか。仕事に夢中になり、地域のいいところを見過ごしてきたのだろう。よくある話である。その時には、ここが次の仕事のフィールド、そしてクリスタージュに続く筆者の思い出の場所になるとは夢にも思わなかった。



御供所の聖福寺(平成５年頃)

さて、都市景観の話に入ろう。都市景観には大学時代から興味はあった。鹿島出版発行のSD選書「都市の魅力」を読んで、大学１年の春休みに小倉中心部の都市景観を調査・分析したことがあった。これは大学の課題ではなく、自分でテーマを決めて自主的に行ったものである。その頃から都市景観に興味を持ち始めていたと思う。また、社会人になってからは、歴史的町並みへの興味も出てきた。新しい街並みとしては、槇文彦氏の代官山プロジェクトや宮脇壇氏コーディネートの六甲アイランドプロジェクトなどに興味があった。

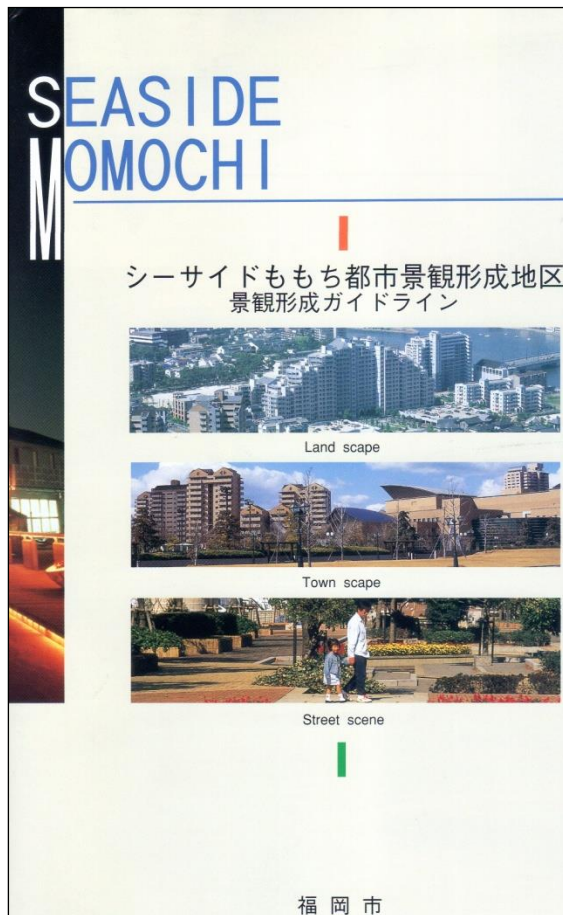
都市景観室で筆者が業務として担当したのは、都市景観条例に基づく「都市景観形成地区の指定」である。これは地域が主体となって、それぞれの地域の特性を活かした景観まちづくりを進めていく手法である。当時は「シーサイドももち地区」「御供所地区」「天神地区」「空港西側エアフロント地区」の４地区がその候補に挙げられていたが、この中で筆者の思い出に残るのがシーサイドももち地区と御供所地区である。

シーサイドももち地区は、まちづくりの指針であるアーバンデザインマニュアルに沿ってまちづくりが進められている埋立地だけでなく、よかトピア通り沿道の市街地を含めたエリアを対象として、土地利用ごとにゾーニングを行い、それぞれの景観形成方針と基準を作成し地元協議を進めた。上司の一ノ宮係長や屋外広告物担当の藤原係長と３人で毎日のように地元に行き、「福岡空港周辺にあるような大型広告物が、よかトピア通り沿道にも乱立する可能性が高い」ことなどをシミュレーション画像で説明し、景観形成地区指定への理解を深めていただいた。

どの地域も景観形成地区指定には賛成であったが、難航したのは百道浜戸建住宅地区である。ここは当初から建築協定や緑地協定によるまちづくりが進められ、地元も熱心に取り組んでいた

が、協定の細かな運用を巡り景観形成地区指定の合意がなかなか得られなかった。しかし、粘り強い協議の末、合意を得て、福岡市内で初めて景観形成地区として指定した。平成8年4月のことである。筆者が都市景観室に配属になってから3年の月日が流れていた。

また、この年の秋には都市景観大賞（国土交通大臣賞）を受賞した。受賞理由はアーバンデザインマニュアルに基づくこれまでの取り組みと、それを将来にわたり維持・育成していくため景観形成地区に指定したことである。筆者も当時の都市整備局長に随行して表彰式に行かせていただいた。担当者としてクリスタージュに続き、2回目の国土交通大臣賞に貢献したことになり、嬉しく思う。



シーサイドももち都市景観形成地区 景観形成ガイドライン

なお、シーサイドももちのエピソードとしては、景観形成地区指定の地元説明を進めている最中に、よかトピア通りに面した建物の屋上に大型看板が無許可で設置されたり、福岡ドームの正面階段にビール会社の広告が設置され、話題になったことなどであろうか。今となっては、いい思い出である。

筆者は隣の愛宕浜に住んでいることもあり、福岡市総合図書館や福岡市博物館などシーサイドももちに行く機会が多い。また、能古島に行くフェリーや愛宕神社からシーサイドももちの街並みを見る機会も多い。いつも街並みの状況は気になっているが、概ね良好な形で維持されていると思う。



シーサイドももちの現在の街並み(平成 28 年 11 月～12 月)

(5) 御供所都市景観形成地区の指定

次に御供所のことに触れよう。前述のとおり、筆者が御供所の存在を知ったのは、交通局の上司に案内された平成 5 年 4 月中旬である。都市景観室に異動になる直前であった。

最初に御供所を歩いた時の印象は、「お寺が多い」「都心部にこれほどの歴史的環境が残っている地域は珍しい」ということである。歩けば歩くほど新しい発見があった。何よりも昔ながらの地域コミュニティが現在も息づいていることが素晴らしい。最初の思い出は、その年の山笠の時に御供所まちづくり協議会の瀧田会長の自宅にお酒を持って行き、大きな器で日本酒をいただいたことである。料理はすき焼きだった。とても美味しかった。その後、秋山副会長の自宅にも行き、お酒をいただいた。普段は静かなまちであるが、山笠の時はとても賑わっていた。

また、御供所まちづくり協議会の役員との最初の打ち合わせ（顔合わせ）は、その年の 9 月であった。場所は御供所の老舗割烹「たぬき」である。まちづくり協議会からは瀧田会長、秋山副会長、富田副会長、船越事務局長の 4 人、都市景観室からは大和室長、一ノ宮係長、森係長、筆者の 4 人が出席し、それぞれ御供所への想いを語り合った。この活動記録を書いている時に昔の打ち合わせ録を読み返してみた。その中に協議会の意見として「御供所の最大の課題は、人が定住し、まちが活性化することであり、地域の特徴である歴史性を活かして定住、活性化につなげていきたい」「景観だけでなく、地域のまちづくりやライフスタイルに踏み込んで考えてほしい」などと記されている。懐かしい。もう 24 年前のことである。



聖福寺と幻住庵の間の路地



伝統的町家建築と聖福寺



普賢堂の町並み



聖福寺の前を走る山笠

(※写真はいずれも平成5年頃撮影)

御供所については、まちづくり協議会を平成6年10月に都市景観条例に基づく「景観づくり地域団体」に認定し（福岡市では第1号）、地域との協働のまちづくりをスタートした。当時はまだ「住民参加のまちづくり」が叫ばれ始めた時であり、福岡市でも博多部が先駆的な事例となった。御供所も他の地域と同様、地域の方々が住み慣れた場所に対して魅力を感じていないことが一番の課題であった。このため、住民アンケート調査、ワークショップ、講演会、先進都市視察などを行い、少しずつ地域の関心を高めていった。

この中で特に印象に残るのは、平成8年3月に御供所小学校で実施したワークショップである。当初は50名程度の参加を予定していたが、地域内外から150名以上の市民に参加していただいた。内容も講演会、まち歩き、ワークショップ、シンポジウムと盛りだくさんであった。



景観づくり地域団体の認定(平成6年10月)



御供所小学校でのワークショップ(平成8年3月)

また、先進事例を調査するため、いろいろな地域に視察に行った。筆者がまちづくり協議会の会員といっしょに調査に行ったのは、京都、奈良、富田林、出石、長浜、金沢などである。どこも歴史的な環境を活かしたまちづくりの先進地である。最初に京都に視察に行った時には、京都市の当時の景観担当係長の荻谷勇雅氏に説明していただいた。荻谷氏は後に文化庁に行かれ、全国町並み保存連盟でも活躍されている。その後、筆者は何回も荻谷氏の話をお聴きする機会に恵まれた。御供所の取り持つ縁であろう。

富田林では、前日にお酒をたくさん飲み、当日も吐き気が続き最悪の体調であった。しかし、現地に到着し、冒頭の挨拶をする時には何とか回復。瀧田会長が「挨拶する時はしっかりしとった。さすがやねー」。昼食にお寿司を用意してもらっており、お腹の具合が少し気になったが、しっかりごちそうになった。富田林の代表が「まちづくりは焦るな、怒るな、根気よく」と言っていたことが印象に残っている。姫浜でも筆者がよく使った言葉である。

出石は土色の町並みが特徴で、蕎麦やお酒も美味しかった。雪もかなり積もっていたことが記憶に残る。金沢でも雪を体験することができた。金沢は雪国の印象があるが、雪が積もることは少ないようだ。雪の兼六園や茶屋街、武家屋敷も風情があった。それぞれの視察は、まちづくり協議会のメンバー数名と筆者が参加し、コミュニケーションや信頼関係を築いていった。



京都市西陣大黒町の視察



視察を終えて懇親会(京都)



雪の兼六園(金沢)



雪の武家屋敷(金沢)

その後も、まちづくり講演会、ワークショップなどを重ねながら、景観づくりへの関心を高めていったが、苦労したのは、どういう景観を目指すのか、どうしたらいい景観になるのかを地域の方々にわかりやすく伝えることだった。そのため、できるだけ図やイラストを使い、場合によ

ってはパースや模型を作成することもあった。

こうして御供所まちづくり協議会のメンバーと協議を重ね、景観形成地区の区域、方針、基準の案を作成し、平成10年5月から地元説明会を始めた。地域の方々は概ね前向きだったが、別の場所に住んでいる地権者の中には「なぜ聖福寺が中心なのか。博多の中心は櫛田神社だ。」と市役所に怒鳴り込んで来る方もいた。また、御供所は山笠の流れは大半が東流であるが、一部恵比寿流の地域があり、地域コミュニティの難しさを痛感することが何度もあった。



まちづくり講演会やワークショップの開催(平成8年)

いろいろなことはあったが、この年の秋にシーサイドももち地区に続く景観形成地区の第2号として指定した。地元に入って5年半かかったが、それだけ思い入れも多い。

2.都市景観形成地区指定について

御供所地区固有の歴史・文化を活かし、地域と行政の協働によるまちづくりを推進していくために、福岡市では同地区を平成11年1月18日に「都市景観形成地区」に指定しました。また、区域内のそれぞれの特性を活かしたまちづくりを進めていくため、下図のようなゾーニングを行いました。

2-1地区全体の景観形成方針

- ・聖福寺、承天寺、東長寺などの歴史的寺社群、境内の豊かな緑、地域コミュニティを育んできた路地や木間割りなどを活かし、歴史と文化の中に生活と祭りが豊づく都心居住地区としての魅力あるまちなみの形成及び保全を図る。
- ・歴史的環境地区にふさわしい街路、散策路、オープンスペースなどの整備を進め、歴史的建造物やまちなみを結ぶ歴史回遊ネットワークの形成を図る。

2-2区域とゾーニング

3.まちなみをつくるための工夫

ここからは、御供所地区のまちなみをつくるための工夫について、イメージ図や各都市の事例を通して説明します。それぞれの地区の景観形成基準を理解して、以下に述べるような工夫をする必要があります。

3-1建物の配置と高さ

ここでは、今までの町家が継承してきた約束事についてふれます。これは、御供所地区のまちなみをつくってきた重要な要素ですので、今後とも十分配慮されることが望めます。

(A=まちなみ壁面線、B=まちなみ斜線)

A まちなみ壁面線
1階の庇を道路境界線にそろえた場合、建物の壁面は道路境界線から1m程度の位置にあり軒下空間が確保されています。この壁面の位置を「まちなみ壁面線」とします。

B まちなみ斜線
建物による道路空間の囲み具合を示すもので、軒先空間と道路に面した部分の軒先の高さが1:1程度の比率にあるのが特徴です。これにより1:1~2:1のまちなみが確保されています。道路中心線から1:2で立ち上がる斜線を「まちなみ斜線」とします。

① A.Bともに適用した場合

まちなみの連続性に優れ、かつ御供所地区の各通りで見られるまちなみに近いものです。

② Aのみ適用した場合

突出した高い建物により、まちなみの連続性が損なわれます。

③ Bのみ適用した場合

建物が後退したため壁面の凸凹ができ、まちなみの連続性が損なわれます。また、仕上げをしていない隣家の側壁が見えてきます。

④ A.Bどちらも適用しない場合

何も基準を定めないと、まちなみが乱雑になります。

御供所都市景観形成地区 景観形成ガイドライン

景観形成地区指定後、街路整備やお寺の塀・門の修景は進んでいる。また、筆者が御供所に関わり始めた平成5年頃は福岡市民にほとんど知られていなかった御供所であるが、景観づくりの取り組みを通して「寺町・御供所」として知られるようになったことは本当に嬉しい。



東長寺五重塔(左)と聖福寺境内(右)



博多千年門



承天寺前の道路



聖福寺



普賢堂の町並み

最近の御供所(平成28年12月)

（６）御供所・瀧田喜代三さん

御供所を語る時に、御供所まちづくり協議会の初代会長の瀧田喜代三氏を抜きには語れない。御供所まちづくり協議会が発足したのは、平成５年３月である。瀧田さんは当時、現役の会社員で忙しい時期であったと思われるが、地域の重鎮の方から推され初代会長に就任した。筆者が都市景観室に配属されたのは、その年の４月である。それ以来の付き合いである。

瀧田さんは４０代後半の頃、勤務先から東京転勤の話があったが、「わしゃ博多の人間ですけん」と断ったそうだ。半世紀以上、山笠を昇ってきたが、その間、祭りの伝わる博多部の人口が減少し、瀧田さんの所属していた櫛田流が消滅し、東流に移る悲哀も味わったそうだ。それだけに、山笠の伝統を継承し、後世に残す責任を重く受け止められた。平成２０年～２５年に第９代博多山笠振興会の会長もされ、「山笠を世界に発信したい」という大きな目標を持ちつつ、一方で祭りの斎行には細心の注意を払われた。

また、筆者は瀧田さんほどリーダーシップのある方を知らない。それを強く感じたのは、景観形成地区指定や道路整備の説明会の時である。総論賛成で各論反対はよくあることであるが、いろいろな意見が出て、地域のために前向きにまとめていく姿勢は素晴らしい。先輩に敬意を表し、後輩を育てることも大いに見習いたい。筆者の長男も就職する前には、ぜひ瀧田さんに会わせたいと考えている。

瀧田さんとはよく飲みにも行ったものだ。協議会の定例会やイベント後の飲み会はもちろん、山笠期間中の直会（なおりい）には毎年のようにお酒を持参した。直会にはいろいろな方々が来られており、瀧田さんの人柄や顔の広さがよくわかった。山笠だけでなく、いろいろな面で人とのつながりをもたれている方である。また、瀧田さんとは、奈良、富田林、京都、出石、八女などの先進都市視察にも行き、視察後は各地域の美味しいお酒を飲みながら、御供所のまちづくりについて語り合ったものである。奈良の視察が終わり、みんなでお酒を飲みに行ったが飲み過ぎたのだろうか、翌日の富田林に行くまでは吐き気が続き最悪の体調であったことも、今ではいい思い出である。出石では、名物の出石蕎麦を食べながら美味しいお酒を楽しんだ。



景観づくり地域団体の認定（左から四番目が瀧田さん）



ワークショップ（左が瀧田さん）

御供所まちづくり協議会会長時代の瀧田さん

筆者は平成１２年３月まで都市景観室に在籍したが、その後も瀧田さんとの付き合いは続いている。山笠での陣中見舞いにはできるだけ行くようにしている。政令市の会議がある時などには、瀧田さんに山笠の講演をしてもらったことも数回ある。唐津街道姪浜まちづくり協議会でも平成

27年5月に講演してもらったが、そのリーダーシップは見習うものがある。参加者全員が感じたことだと思う。その時の懇親会は姪浜の名店・御園（みその）。美味しい魚料理とお酒、楽しい会話で盛り上がったことは言うまでもない。姪浜で獲れるトンマという魚が特に美味しかったと言っていた。



瀧田さんの講演会



瀧田さんを囲んでの懇親会

その数週間後、親類の方がアメリカから来られるということで、瀧田さんに代わって御園を予約した。トンマを食べたいと言っていた。また、その年の山笠の直会でも御園を使っていた。こうして人のネットワークがまちのネットワークにつながっていくのだろう。瀧田さん、また御園にトンマを食べに行きましょう。



瀧田さんの本場の博多手一本

（７）海外派遣研修

平成７年の海外派遣研修も市役所生活の思い出である。これは、「欧州における都市デザインの潮流」をテーマにロンドン、フランクフルト、ベルリン、シュトゥットガルト、バルセロナ、パリの６都市の都市景観施策について約３週間にわたり調査を行ったものである。目的は、福岡市の今後の各地域固有の歴史や魅力資源を活かしたまちづくりや景観づくりの参考にすることであった。

当時は、御供所やシーサイドももちの景観形成地区指定の地元協議などを進めている最中であったが、上司や同僚の理解と協力を得て行かせていただいた。

各都市の調査テーマ

○ロンドン

- ・ 歴史・伝統を尊重したシティの街並み景観コントロール制度について
- ・ 歴史的文脈を現代建築に取り入れているドックランドの都市デザインについて

○フランクフルト

- ・ 国際コンペの導入による公共建築の先導的役割について
- ・ 都市空間の質的改善を目的とした都市デザイン事業について

○ベルリン

- ・ 都心居住をテーマにした、マスターアーキテクト方式及び住民参加方式によるまちづくり・都市デザインについて……IBA（国際建築展ベルリン）
- ・ ベルリンの壁崩壊後の首都移転計画及び新都市計画について

○シュトゥットガルト

- ・ Bプランによる街並み形成状況について
- ・ 環境共生型の都市デザインについて
- ・ 人にやさしい公共交通と、回遊性の高い歩行者空間について
- ・ 歴史的建造物群の保全と都心居住への一体的取り組みについて

○バルセロナ

- ・ ロマネスク、カタロニアゴシック、そしてアントニオ・ガウディに代表されるカタロニアモデルニスモの建築と現代建築が調和し、歴史的継続性・重層性を感じさせるバルセロナの都市デザインについて
- ・ 近年の都市再建プロジェクトについて

○パリ

- ・ 主要軸線、シンボル広場及びそれらのネットワークについて
- ・ 歴史都市と先端建築が融合したグラン・プロジェのまちづくりについて





ロンドンの街並み



フランクフルトの街並み



ベルリンの街並み



シュトゥットガルトの街並み



バルセロナの街並み



パリの街並み

海外派遣研修を終えての当時の感想

今回調査した6都市は、どこに行っても画一化・均質化した日本の都市空間とは全く異なり、素晴らしい刺激を与えてくれた。フランクフルトのムゼウム・ウファールプロジェクト（公共建築の先導性）、ベルリンの首都移転計画と IBA（国際建築展ベルリン）、シュトゥットガルトの環境共生型の都市デザイン、歴史的重層性・継続性を感じさせるバルセロナの都市デザイン、度肝を抜くパリのグラン・プロジェは、どれも個性的で魅力あるプロジェクトであった。

特に感動したのが、シュトゥットガルトの徹底的に人にやさしく、エコロジーに配慮された都市空間である。今後の日本のまちづくりの素晴らしい参考例となるだろう。また、ベルリンの首都移転計画をはじめとする各種のプロジェクトはとても感動的であった。東西冷戦後のベルリンの変容は驚くべきスピードで進んでおり、国際的な建築家による大胆なプロジェクトは未来の輝かしいベルリンを約束しているように思える。こうした取り組みは、すぐ福岡市のまちづくりに役立つものではないが、歴史的な文脈を現代に大胆に取り入れていくというスケールの大きな発想や、徹底した環境共生型の都市デザインなどは、大いに参考にしていきたい。

真面目な報告書は興味のある方に見ていただくとして、この研修期間中のエピソードを紹介しよう。ロンドンでは日本で予約済みのミュージカル「レ・ミゼラブル」をパレス・シアターで観たが、日中かなりの時間をかけて歩き回っていたので、その疲れもありほとんど寝ていた。しかし、本場のミュージカルは迫力があつたことだけは覚えている。イスラエルのラビン首相が暗殺されたニュースを見たのは、ロンドンのホテルだった。

また、どうしても見ておきたい場所があつたため、フランクフルトへの移動の直前までロンドンのまちを歩き回っていた。そのため、タクシーで空港まで移動することになったが、持ち合わせの英国ポンドが少し足らず、持っている限りのポンドで勘弁していただいた記憶がある。



ロンドンでは「レ・ミゼラブル」を鑑賞

フランクフルトには3泊したが、一人の外出は不安であり、ビールとソーセージ、パンを中央駅で買い込み、その日の反省と翌日のスケジュールの確認をしながら夕食を取った。ちなみにドイツでは、朝食はホテルのバイキングをしっかりと食べ、昼食は軽食で済ませ、夕食は現地で買った食材とビールで済ませることが多かった。多分、朝食が一番充実していた。

ベルリンでは、やはり「ベルリンの壁」が印象的であつた。1989年11月にベルリンの壁が崩壊するまで約30年の間に、境界沿いの建物から飛び降りる子どもや、地下通路を掘ったり、気球や車でこの壁を乗り越えようとした人々の涙ぐましい努力を「ベルリンの壁博物館」で見ることができた。中には、監視兵に見つかって射殺された人もいる。そうした悲劇の歴史をぜひ見てほしい。ここで購入した絵葉書で家族に手紙を出したが、その手紙が現在も手元に残っている。懐かしい。

また、せっかくの機会であつたので、ベルリンフィルハーモニーや国立歌劇場でコンサートを聴いたり、オペラを鑑賞したりして有意義な時間を過ごした。フィルハーモニーでは最前列の席、歌劇場ではバルコニー席だったと記憶している。

シュトゥットガルトは、世界に誇る自動車メーカーのベンツとポルシェのまちでもある。筆者はベンツ本社にある博物館を見学した際、ミニチュア模型を購入しようとしたが、夕方の5時を少し過ぎており、レジを閉めたということで、購入できなかった。いかにも几帳面な国ドイツらしいと思った。模型は、その5年後の平成12年に再度シュトゥットガルトを訪問する機会があり、そこで2台を購入。こんなに早く再訪できるとは思っていなかった。



ベンツのミニチュア模型

シュトゥットガルトからバルセロナには小さなプロペラ機で向かったが、上空からシュトゥッ

ツガルトの地形の構造が一望できた。東側にネッカー川が流れ、北、西、南はすべて丘陵地で、それに囲まれた盆地に市の中心部が広がっていた。周辺の黒い森（シュヴァルツヴァルト）が印象的だった。

次はバルセロナ。海の向きは違うが、都市の規模や気候、環境が福岡に似ていると思った。ここで、私費で調査に来ていた福岡市役所の森俊彦さん、古賀有子さんと合流。今まで一人で不安な面もあったが、ほっとしたことを覚えている。彫刻家の外尾悦郎さんには多くの時間を割いていただき、現地案内や食事につき合っていた。サグラダ・ファミリア教会では、普段入れない場所にも案内していただいた。ガウディ研究家のパセゴダ教授にもお会いすることができた。

福岡市役所に入る前にガウディの建築を見る予定であったが行けなかったため、9年越しの希望がかなったことになる。お土産としてガウディの作品集を集めた翌年のカレンダーを買って帰り、みんなに喜ばれた。



ガウディの作品集のカレンダー



ガウディ研究家のパセゴダ教授を囲んで(右が筆者)



彫刻家の外尾悦郎さんと記念撮影(左が筆者)

最後はパリ。パリでは西南学院大学の後藤新治先生に案内していただいた。先生が住んでいた「イロ（中庭）」のあるアパートも訪問。都市型高密度住宅が広場の発達につながったことがよく理解できた。クレイジーホースではナイトショーも見学。日本とは違い、健康的なキャバレーである。いっしょに行った古賀さんも楽しんでいただけたようだ。また、ルーブル美術館ではモナリザをゆっくり観賞することができた。ストライキの影響でエールフランス機の運航が心配されたが、無事に出国することができた。

こうして3週間以上にわたる海外研修は無事に終了。この研修では多くの方々にお世話になった。ドイツの各市役所の皆さまには下手な英語で迷惑をかけた上、貴重な資料まで提供していただいた。また、バルセロナでは外尾さん、パセゴダ教授、パリでは後藤先生に貴重な時間を割いていただき案内をしていただいた。また、バルセロナとパリで行動を共にした福岡市役所の森さんや古賀さんには、楽しい時間を過ごさせていただいた。この場をお借りして皆さま方に改めて感謝の意を表したい。

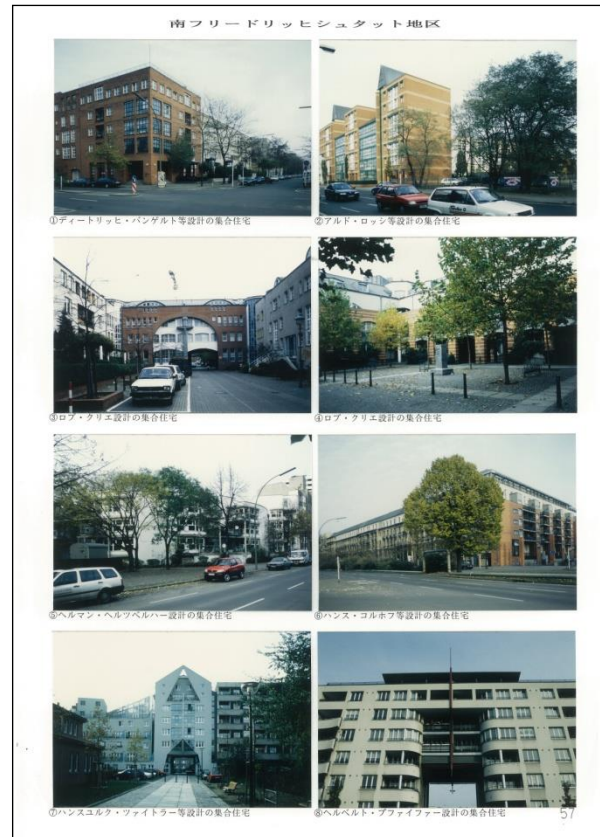
【海外派遣報告書の抜粋】



ロンドン:シティの街並み



バルセロナ:ウォーターフロントのランドスケープ・デザイン

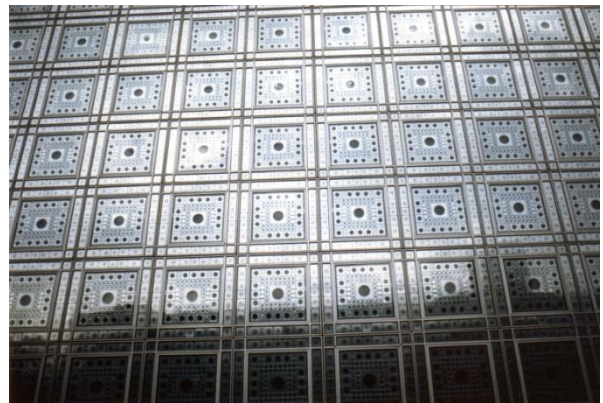


ベルリン:IBA(国際建築展ベルリン)



パリ:グラン・プロジェ

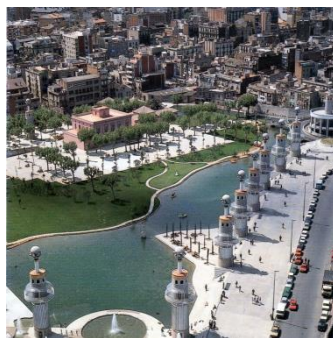
【今回の研修で思い出に残った建築物や都市空間】



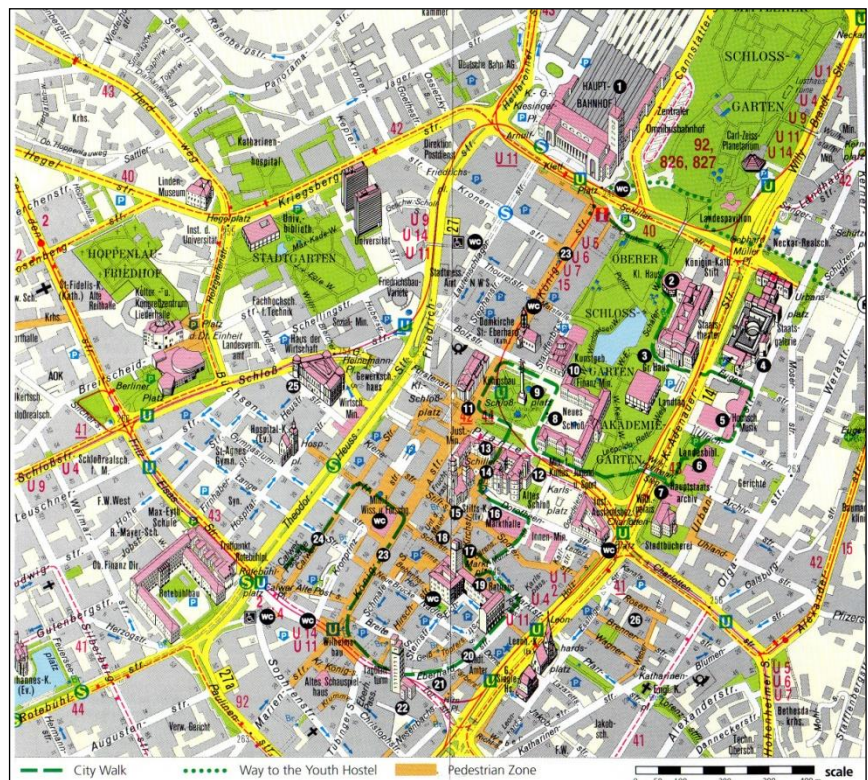
アラブ世界研究所(パリ)



オルセー美術館(パリ)



バルセロナ:ランドスケープ・デザイン



シュトゥッツガルト:徹底的に人に優しい公共空間

（８）福岡都市科学研究所配属

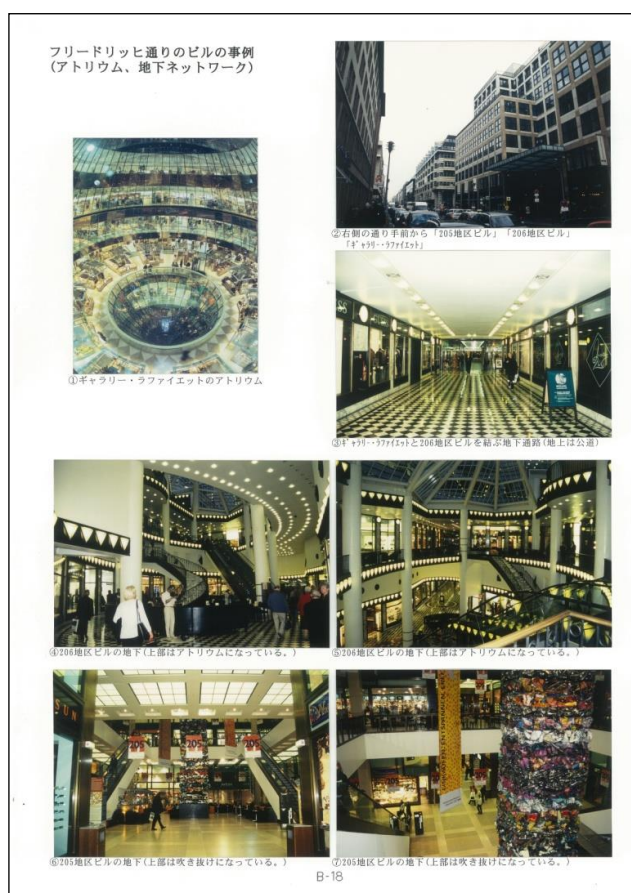
平成12年4月から研究主査として福岡都市科学研究所(通称 URC。現福岡アジア都市研究所)に配属された。1年目は「福岡の地下空間の利用に関する研究」を担当。ドイツのベルリンやシュトゥットガルト、オランダのアムステルダム、ユトレヒトなどに調査に行かせていただいた。また、研究成果を早稲田大学で開催された土木学会で話したこともある。責任者の樗木武先生の紹介もあり、建築学会にも所属していないのに、いきなり土木学会で話すことになった。あまり専門の分野ではなかったこともあり、かなり緊張していたことを覚えている。



ベルリンでのヒアリング



アムステルダムでのヒアリング



ベルリンの事例



アムステルダムの事例

「福岡の地下空間の利用に関する研究」での海外都市調査

2年目と3年目は「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」を担当した。責任者は福岡大学の阿部真也先生であり、筆者は阿部先生といっしょにイギリスのコッツウォルズ、エジンバラ、ドイツのハノーバーなどに調査に行かせていただいた。

この研究では、広域連携のメリットをいかにわかりやすく伝えていくかが大きな課題であった。そのため、研究論文だけでなく、地域デザイナーの高山美佳氏に依頼して研究の成果を「ひろがる つながる」というわかりやすい絵本にさせていただいた。筆者の長男が田主丸に遊びに行った時のことが印象に残り、長男をモデルにしたそう。研究には専門家だけでなく、市民にわかりやすく伝えていく視点が大切である。これは地域のまちづくりにも同じことが言えるのである。



バーミンガムでのヒアリング



ハノーバーでのヒアリング

パイプリーの街並み



①スワン・ホテル

②コルン川に面した住宅



③アーリントン・ロウの家並み。
コッツウォルズ地方を代表する風景とされている。

④アーリントン・ロウの家並み(ディテール)



⑤アーリントン・ロウの家並み

⑥アーリントン・ロウの家並み。
石造りの家が、時を止めたかのように静かにたたずんでいる。

- 38 -

エジンバラの街並み
(ニュー・タウンの街並み)



①カールドン・ヒルからのニュー・タウンの眺望景観

②エジンバラ城からのニュー・タウンの眺望景観



③オールド・タウンのNORTH BRIDGEからニュー・タウンを見る。
この橋を渡るとニュー・タウンに入る。
正面に見えるのは中央駅(ウェーヴァリー駅)



⑤ニュー・タウンの街並み



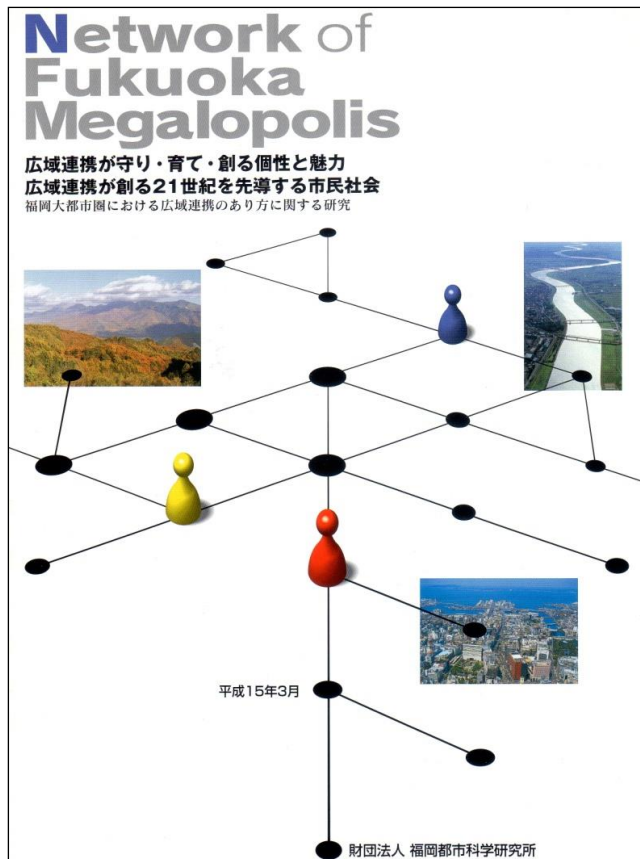
⑥ニュー・タウンの街並みと歩行者空間

- 45 -

コッツウォルズ(パイプリー)の街並み

エジンバラ(ニュー・タウン)の街並み

「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」での海外都市調査

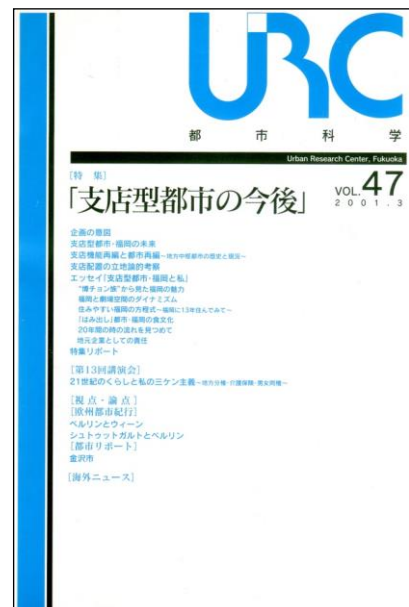


「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」報告書概要版(抜粋)

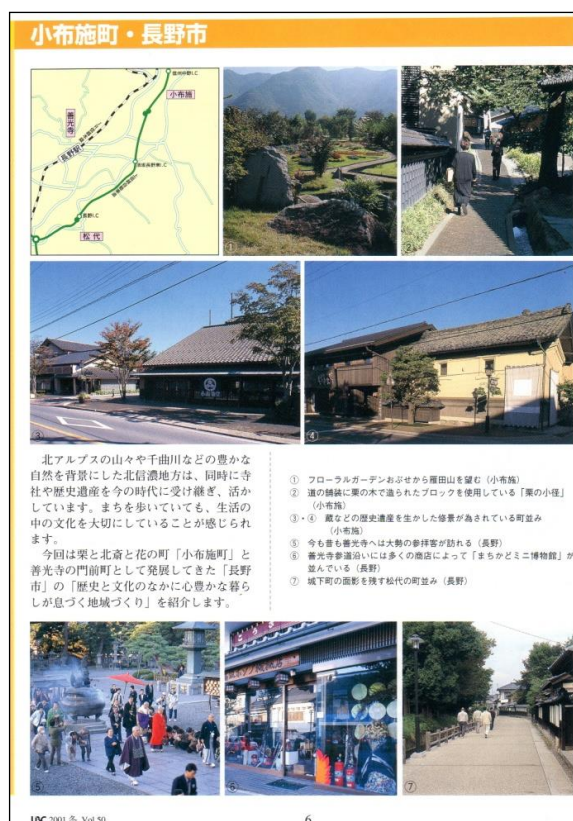
また、阿部先生とは縁があって、平成26年の夏に姪浜のまちづくりの取材を受けることになった。高山さんには唐津街道姪浜まちづくり協議会のアドバイザーとして毎年のように来ていただくことになる。URCで構築した人的ネットワークは、その後もいろいろな場面で活かされることになる。これが、URCでの一番の成果ではないかと思う。

この他、雑誌「URC都市科学」の企画・編集や執筆も担当したことがある。企画・編集では第47号の「支店型都市の今後」を担当。執筆者への依頼や文章の校正も行い、責任をもって1冊の本に仕上げた。自分でも高松市の取り組みを取材し執筆した他、ベルリンとシュトゥットガルトの都市紀行も執筆した。かなり忙しかったが、充実していた。

他都市調査に行く機会にも恵まれた。特に思い出に残るのは、長野県小布施町である。都市景観室時代に2回訪れていたが、何度訪れても面白いまちである。半径2kmの範囲にいろいろな見どころが満載であり、1年間の観光客(約120万人)は人口(約1万2千人)の100倍にもなる。「小布施流」のこだわりのまちづくりは、景観づくりや地域活性化などの様々な面で御供所や姪浜の参考になる。筆者が「姪浜流」のまちづくりを言い出したのは、小布施流から借りてきた言葉である。



「URC 都市科学」第47号の企画・編集



筆者による執筆事例



福岡都市科学研究所在籍中の筆者



当時の上司や同僚(前列左が筆者)

（９）耐震や空家対策の仕事

福岡都市科学研究所の次は、UR（都市基盤整備公団⇒都市再生機構）に２年、住宅管理課に１年、都市景観室に３年、都市計画課に１年在籍した。

UR（平成１５年度～１６年度）では、住宅供給公社時代にクリスタージュでお世話になった西部ガスの津村さんと再会。津村さんも同じ時期にURに出向し、２年間同じ部署で仕事をする事になった。これも何かの縁であろう。

また、６年振りに戻ってきた都市景観室では、都心部の景観形成や広告付きバスシェルターなどを担当（平成１８年度～２０年度）。広告付きバスシェルターについては、エムシードウコー、西鉄、県警、福岡市の関係課などとの協議や調整に苦労したが、平成１８年１１月に天神日銀前バス

停にモデルを導入した。最初の広告が、シャネルの5番（香水）であり、女優のニコール・キッドマンさんの印象が今でも強く残っている。各バスシェルターに周辺の案内地図を付けたことや広告のデザイン審査を導入したことも、福岡市独自の取り組みであった。



広告付きバスシェルターの導入(天神日銀前バス停) ©MCDcaux

建築物の耐震の仕事は、平成 22 年度～24 年度の 3 年間。その後 2 年間の市営住宅の建替の仕事を経て、平成 27 年度～現在まで再度携わり、通算 5 年になる。姪浜の活動への関わりが平成 17 年の福岡県西方沖地震であることから、耐震の仕事とは無縁ではない。

筆者が耐震の仕事に関わり始めた平成 22 年度は、西方沖地震から 5 年後であり、異動になる直前に西日本新聞の記事で「震度 6 弱から 5 年」という見出しで、まちづくり協議会の案内所がマイヅル味噌のみそ蔵の中に開設されたことが紹介された。そういう意味では、タイムリーな異動だったのかも知れない。平成 23 年 3 月には東日本大震災があり、「建築物の耐震」が改めて注目を浴びた時期でもあった。

筆者は、耐震の出前講座で約 50 回、「民間建築物の耐震化への取り組み」について話した。いきなり地震や耐震の話をしてもわかりにくいので、導入部としていつも「私と西方沖地震との関わり」ということで、姪浜の取り組みを 10 数枚の写真で紹介した。例えば、活動のきっかけとして、西方沖地震で姪浜住吉神社の鳥居や門が倒壊したり、伝統的な町家が半壊した写真を紹介した。

姪浜住吉神社の説明では、宮司がみのもんたのクイズ・ミリオネアに出て、見事全問正解し 1,000 万円を獲得し、鳥居や門の再建資金の一部に充てたことを紹介すると会場は大いに盛り上がった。「縁起のいい神社であり、姪浜にお越しの際にはぜひお立ち寄りください」と宣伝も忘れなかつ

た。この他、西方沖地震前に屋根を軽くして被害を軽減できたマイヅル味噌の建物も紹介。市役所の業務ではあるが、姪浜の宣伝もしっかりさせていただいた。まちづくり協議会の初代事務局長は、地域の宣伝部長でもあった。

また、2回目となる耐震の業務で印象に残るのは、平成28年4月の熊本地震により、市民からの問い合わせが殺到したことである。隣県で発生した地震は福岡市民に与える影響も大きく、耐震診断の相談や耐震改修助成の申請も大幅に増えた。ちょうど福岡市耐震改修促進計画の改定を進めている時期であり、熊本地震の知見をどう盛り込むかが課題であった。大学時代を熊本で過ごし、卒業後も熊本や阿蘇などによく遊びに行っていた筆者にとっては、大きなショックであった。仕事に専念する意味でも、まちづくり協議会の卒業を決意した。



西方沖地震から5年後の
西日本新聞の記事



出前講座でよく紹介する福岡県西方沖地震での
姪浜での被害例



耐震改修セミナーでの熊本支援のメッセージ

空家対策の仕事は、平成27年度からである。空家の中でも適正に管理されていない放置空家対策に関する業務である。放置空家対策の課題としては、「相続による権利者の複数化や遠隔地居住による責任意識の欠如や希薄さ」「所有者や相続人の所在不明や所有者死亡後の権利関係の未整理などによる指導の困難さ」「解体費の工面や解体による固定資産税のアップなど経済的な事情」などがある。平成27年5月に「空家等対策の推進に関する特別措置法」が完全施行され、マスコミ

に大きく取り上げられると、市民からの相談や苦情が大幅に増加し、対応に苦慮した。

姪浜でも地域から相談や苦情を受けている物件が数件ある。解体や修繕など是正がされた物件もあるが、いろいろな事情で是正が進んでいない物件もある。一方、まちづくり協議会においては、空家の改修の相談を受け、伝統的な町家が再生されたものもあるし、まちづくり協議会の事務所兼まちの案内所として自ら改修・活用したものもある。また、筆者が活動をする中で、古い町家が活用され、カフェや飲食店、美容室などとして再生された事例も増えつつある。こういう意味でも空家対策の仕事も何らかの縁があるのであろう。

平成 28 年 11 月には、前宮崎県知事の東国原さんらと空家についてのシンポジウムに登壇する機会に恵まれ、福岡市の放置空家対策の紹介とともに、姪浜で筆者が主体的に取り組んだきた空家活用の事例も紹介させていただいた。シンポジウムの話題提供ということであるが、ここでも姪浜の取り組みをしっかりと紹介させていただいた。協議会を離れても、姪浜への想いは強い。



空家についてのシンポジウム(平成 28 年 11 月)

【参考】地域のまちづくり活動として取り組んだ身近な空家活用事例

○空き店舗をまちづくり協議会の事務所として活用



改修前



会員による改修



【参考】地域のまちづくり活動として取り組んだ身近な空家活用事例

○空き店舗をまちづくり協議会の事務所として活用



改修後の活用風景



姪浜の空家の活用事例も紹介

コラム3 北九州市立中央図書館再訪

大学に入り、建築を志した時に磯崎新氏が設計した建築巡りを始めた。北九州市立中央図書館は、その中でも群馬県立近代美術館と並んで筆者の印象に残る作品である。大学時代と社会人時代に数度訪れているが、今回は約30年振りの訪問となった（平成29年1月20日）。

リブヴォールトの空間が新鮮さと懐かしさを感じさせる。築40年以上経っているが、改修を続けながら大切に使われている。ガラス張りのスロープからは小倉城や北九州市役所、リバーウォーク北九州などを見ることができる。また、スロープに沿って閲覧室が分節配置され、各自が好きな居場所を確保することができる。落ち着いた本を読める空間でありながら、吹き抜けのヴォールト天井によって空間の連続性も感じることができる。レストランのガラスのモンローカーブが懐かしい。

平成24年に映画「図書館戦争」のロケが行われたこともあり、この日も図書館関係者や文学関係者など多くの団体が視察に訪れていた。併設されていた北九州市立歴史博物館が「いのちのたび博物館」に統合されたこともあり、平成18年から一部は北九州市立文学館として使われている。文学館にあるステンドグラスも久し振りに見ることができた。

なお、この建物は筆者が福岡市住宅供給公社時代にクリスタージュの設計でお世話になった三浦紀之氏が磯崎新アトリエ時代に担当されていた。これも何かの縁であろう。いつまでも大切に使われ続けてほしい建物である。

